
タダシイ冒険の仕方

イグコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タダシイ冒険の仕方

【Nコード】

N3958Q

【作者名】

イグコ

【あらすじ】

「プラティニ学園」ローラス共和国最大の冒険者育成機関である。そこへ通う主人公リジアは魔術師を目指すソーサークラスに所属。愉快で気の合う仲間に囲まれながらも、ちょっと困った事態に陥っていた。え、何？わたし達ってそんなに問題児扱いだったの？——剣と魔法の異世界を舞台にしたちよつと懐かしい雰囲気のリイトノベル風ファンタジー。シリーズ物ですが1話読み切り型です。

プラティニ学園

人間思い通りに行かないとイライラするものだ。今のわたし達がまさにそうで、五人が五人とも眉間に皺を寄せている。

放課後のカフェテリアには居残った生徒たちが何をするわけでもなく、たむろしている。大体は友達と談笑するのに安い学食の飲み物を利用する人々であり、学校の雰囲気の名残惜しむかのようになだだららと他愛無い話を続ける。

その中で笑顔もなく、たまに口を開けばうなり声をあげているわたし達は周りから見れば異様なのであろう。心なしか距離を置かれている。

「…唸っててもしょうがないわね」

そう口を開いたのはわたしの隣に座る美少年。??いや美少女といつてあげるべきか。

肩までの淡い金髪に端正な顔に輝く瞳は吸い込まれるかと思うようなブルー。白地に金の刺繍が施された見事なローブを着こなす姿は、まるでどこかの王子かと見まがうほど。

「と、いつでもあたしには良いアイデアはないわあ」

全てをぶちこわしにする口調で彼、いや彼女はぼやいた。

ここプラティニ学園の名物の一人ヴィクトル・アズナヴァール、自称ローザちゃんである。

「ずるいですよ、そんなこと言い切ったら」

頬を膨らまし抗議の声を上げたのは、わたしとテーブルを挟んで正面に座る美少女。こっちは本物の美「少女」である。

クルクルとウェーブがかった黒髪をツインテールに結び上げ、根元にはピンクのギンガムチェックのリボン。リボンと共布で出来たやたらフリフリのワンピースにフリフリな白いエプロン。もちろん丈は膝上10センチ。足にはやたらごつい白のパンプスを履いている。彼女の名前はイルヴァ・フリユクベリ。二つ名は「コスプレファイ

ター」である。

こう見えても我がプラティニ学園のファイタークラスの生徒であり、足下にはやたらどでかいウォーハンマーが布に包まれて転がっている。

「みんなで良い案を考えなきゃ先に進まないですよ？」

イルヴァが続けると、ローザは飲んでいたオレンジジュースのストローを、ぴつ、と彼女に指す。

「じゃああなたが同じクラスの奴捕まえてきなさいよ。足りないのはファイターなんだし」

「同感だな」

そう口を挟んでいったのはイルヴァの隣で腕を組むアルフレート。アルフレート・ロイエンタール。一見黒いと思われる髪は日に透けると深い藍色をしている。翡翠色の瞳に真つ白な肌。髪の間から覗く耳は人のそれより尖っている。

そう、彼はエルフなのだ。

人間の街にも変わり者のエルフが暮らしていることはあるのだが、かなりの変わり者の彼はなんと人間の学校にまで入ってしまった。見た目はわたし達と変わらない15、6歳に見えるが、物腰というか雰囲気は15、6のそれではない。実際彼が人間の数える年ではないのか…。何しろ千年は生きると言われる種族だ。かなり年上なのは間違いない。

「今必要なのはファイターなんだ。ファイタークラスのお前がなんとかするのが一番早いんじゃないか？」

アルフレートの言葉にイルヴァが反論する。

「私とパーティ組んでくれる人なんていると思います？っていうか」わたしとちと」

その言葉に笑い声を上げたのはアルフレートの隣で何やらガラクタのような金属片をいじくり回していた人物。

こちらにも異種族のフロロ・マール。モロ口族の彼は猫のような耳としっぽを持っている。身長はわたし達の腰ぐらいまでしかなく、顔

も子供のようだ。茶の髪に栗色の瞳。耳としっぽの毛はクリーム色をしているが、彼曰く「モロ口族が一番モテる色合い」だそうだ。

「確かにこのメンバーじゃ、追加のメンバーも集まらないだろうねー」

フロロは言いながらも金属片をいじくりまわし、そこからまた別の金属片を取り出すと「あ、取れた」などと呟いている。

「ちよつとお、一緒にしないでよ」

わたしは堪らず抗議の声をあげる。

「あんたも原因の一つでしょうが……。自覚を持ちなさい、自覚を。またそんな派手な格好して……」

ローザの言葉にわたしは自分の格好を見直す。今日の服装は薄い紫のローブ。わたしの薄い金髪に合っているので自分でも気に入っている。装飾品の多さを教官に軽く咎められたことはあるものの、お年頃なのだから多少は勘弁していただきたい。

「どこが？」

「全部よ！全部！大体が黒以外のローブ着てるの、リジア、あんたぐらいじゃない、ソーサラークラスじゃ」

そうなのだ。ローザの言った通り、わたしが所属するソーサラークラスでは黒のローブが当たり前になっている。別に決まりはないのだが、「魔術師といえば黒でしょ」と言わんばかりに黒一色となっている。一昔前の魔術師がうちに籠って研究に勤しむ時代ならともかく、今となつてはイメージ向上の為にも明るい色にした方がいいと思うのだが……。

個人的な趣味と妙な反骨精神からわたしは黒以外を着ている。といつてもノーマルの黒もたまには着るし、他も紺など無難な色ばかりだ。

「えー、でも『かわいいー、私には出来ないわー』って評判だけど「馬鹿にされてるんだろ」

アルフリースの突っ込みにわたしはむっとする。言い返そうとするわたしを押さえてイルヴァが口を開く。

「まあまあ、ここで言い合ってもしょうがないですよ。このままじや演習に出られないかもしれないんですから」

イルヴァの言葉にわたし達は顔を合わせ、

『はぁーーーーー』

再び大きな溜息をついた。

ここプラティニ学園はローラス共和国最大の「冒険者育成機関」である。

なんでも故プラティニ氏が50年近く昔に「これからは育成の時代だ！」と数々の戦果をあげてきたモンスターハントをやめて、故郷ローラスの古い町、ウェリスペルトに戻り魔導師協会と冒険者ギルドを総合したようなものを作ったのが始まりらしい。

そこへ通うわたしは、名前はリジア・ファウラー、15歳。ここではわたしはソーサラークラスに所属している。魔法のノウハウを学び、特に黒魔術や古代魔術を身につけるクラスだ。

いちおう今年で五期生になるのだが、学園ではこの学年に上がると本格的な実践が始まる。すなわち学園の外に出て実際に冒険者として行動するのだ。手始めにあるのが一週間後に迫った『演習』になる。

これは学園側があらかじめ用意したミッションになり、いわば本道をひたすら行けば出れる簡単な迷路のようなものになっている。とは言っても学生であるわたし達からすれば、初めて学園の外に出て教官のいないところで行動を起こさなければいけないというのは不安である。

さて、今わたし達の前に立ちふさがる問題は何なのかというところ……。

「却下」

わたし達の学年主任であるメザリオ教官はきっぱりと言い切った。

演習に赴くパーティメンバー編成書を提出しにきてわずか数秒のことである。

「え、な……なんで？」

突っ返された編成書を手にしながらローザが乾いた声を出す。

「なんでも何も……メンバーが片寄りすぎだろう」

メザリオ教官は溜息をついた。

わたし達五人はお互いの顔を見回す。

「確かにキヤラは濃いけど楽しいですよ、色々」

フロロガのほほんと答えた。

「楽しいのは結構だがな、戦力的に、というか性格的にというか」教官の言葉はもつともなところもあり、たしかに魔術師に片寄ってる気はする。5人中3人は魔術師クラスである。とはいえメンバーは四人から六人という決まりのはず。そこはクリアしているし、他のグループと比べてもそこまでへんてこりんな編成には思えない。一応とはいえファイタークラスのイルヴァもいるし……。わたし達の不満顔を見て教官は続ける。

「ともかく、君ら5人じゃ私は許可したくないね。いいかい？君らはこれから学園の外で行動するわけだ。いわば学園の顔になつてもらうんだ。わかるね？あと一人……そうだな、君らの暴走を止められそうな冷静な人間が欲しいね」

目が『はつきり言わなくてもわかんたろ？』と語っている。まあようするに『おまえらじゃとつても不安なんで外に出したくないの』というわけか。

「で、でも！」

尚も食い下がるローザに、後ろでお茶をすすっていた女性教官がぴしゃりと言い放つ。

「あなたたちね、一から組み直すか急いで残りの一人見つけてこないとみんな組み終わっちゃうわよ？このままだと全員『研究科』行きだけど……いいの？」

『研究科』……。冒険家の道は選ばず、そのまま学園に残り魔導の

研究などをするクラスだ。

六期生からはほぼ実践のみの学校外授業になるのだが、中には冒険者としてより純粹に研究のみで生活する道を選ぶ人たちが出てくる。そんな人たちの進むクラスになるのだが……。冒険者の方が優れているとは思わないし、それはそれでいいと思うが。

だがしかし！わたし達五人が目指すのは冒険という未知なる世界を旅をする冒険者のはず！研究室でネチネチ研究を続けるためにここに来たのではない！

「わかりました」

「リジア！？」

ローザが信じられない、といった声を出す。がわたしは、

「先生が納得するメンバーを組んできます。もちろんこの五人はこのままで」

メザリオ教官の目を見つめて言い放った。もちろん、当ては………無い。

さて、ここでわたし達メンバーの紹介をわたしから簡単にしたいと思う。

まず、入学してすぐからのお付き合いであるローザちゃん。本名を言われるのを極端にまで嫌がるので、何度も言わないことにしよう。（大変きれいで素晴らしい名前だと思うけど）

彼女がこういった……いわゆるオカマキャラになったのはかなり幼い時からのようだ。少なくともわたしと出会った時にはすでにああであった。過去に何かトラウマでも……ということはなく、完全に生まれついて持った性格らしい。

いじめの標的になりやすいキャラの彼女であつたけど、そこは生まれ持った明るさに加えて、いじめなどという陰湿さを断じて許さない強さが彼女自身を守ってきた。ローザ曰く、

「あんたみたいなマイペースな友達がいたのも大きいわね」

とのことだが、わたし自身はそこらへんはいまいちわからなかったりする。身を呈して守ってやりたりした記憶は無いからだ。

クラス分けが職業別に細分化される3期生になってからは、おたがい「プリーストクラス」、「ソーサラークラス」に別れてしまったが、変わらず仲良くさせてもらっている。

夢は立派な巫女になること。神官ではないのか？と言いたくなるだろうが、そこは触れないであげてほしい。

しかし、わたしは何人の女子のがっかりする顔を見てきたことだろう！そう、ローザは見た目がとことん良いのだ。身長はすらりと高く、容姿端麗、金髪、碧眼とくればまさに女子憧れの王子さま！加えてプリーストクラスでは成績優秀。何も知らずに頬を赤らめて近づいてみれば、

「あらー、あんた転入生？これから一緒にがんばりましょー！」

このキャラの前に撃沈するのである。

そんな彼女が信仰するのは大地の神フロー。別名「愛の女神」である。

お次はコスプレファイターことイルヴァ。

その名の通り毎日が仮装大会の彼女は、ある時はロリータ、またある時はゴスロリ。果てはボンテージに近い黒ファッションやら、時代錯誤の銀の全身鎧まで幅広い。同じ服の日がないのではないかと思われるほどだ。もっとも目にやかましくていちいち覚えてないけど。

しかし、そうとうな衣裳持ちなことは確かで、かなりのお嬢様だと思うのだが……。親御さんはどうお考えなのだろう。

一度授業中の彼女を見かけたのだが、お姫さまのようなヒラヒラドレスでウォーハンマーを振り回す姿には立ちくらみがした。教官たちもよく許してるな、あれ。と思ったが、言っても聞かないので諦めてる可能性もある。

彼女との出会いは去年。共通の友人からの紹介だった。

「趣味が合うかと思って……」

どういう意味だっ!!

そう叫びたくなるのを堪えて、頬を引きつらせながらも握手の手をわたしが伸ばすと、かわいいウサギさんの耳を付けながらにっこり笑顔で手を握り返してくれたのが彼女である。

戦士としての腕前は同クラスの中でも一目置かれるほど。ただし自己申告。

変り者のエルフが学校に入ってきた。

そんな話を聞いたのは、わたしが3期生に上がった時だった。人間より遥かに寿命が長く、また魔力や精神力でも人間のそれとは比べものにならない程優れている彼らは、基本的に人間界には立ち入

らない。それは立ち入る理由がないからである。

たまに物好きなエルフを町中で見えることはあっても、それは「人間の観察」目的である。人間より確実に優秀な生き物であるエルフが、間違ってもその人間から物を教わろう、などとは思わないだろう。

ところがどっこい、彼？？アルフレート・ロイエンタールはプラテイ二学園に入学して来たのだ。

当時、そんな彼を一目見ようと学園中の生徒が彼の元へ詰め掛けた。わたしもその中の一人。

精霊使いとして超が付くほど優秀なことで、エルフ特有の線の細い美貌を持つ異種族を、色恋とは別の憧れの目で見たものだ。

しかし、わたしの予想とは少々違う場所に彼はいた。

「バードクラス」

そう、吟遊詩人のノウハウを学ぶクラスにいたのだ。エルフのイメージといえば、いうまでもなく精霊魔法の使い手としての魔術師の姿だ。しかしながら、

ああ、魔法はもう習うことなんてないだろうな、ちょっとした趣味のつもりで音楽でも習うのかもな。あの見た目だもの、さぞかし様になるんだろう。

誰もがそんなことを考えていたと思う。実際、前半部分は現実に近かったようだ。

ただ後半部分は？？。

若き少年少女に軽くトラウマを与える結果となった。

彼は？？、

そう、音痴であった。

そのひどい歌声に何人の人間が毎夜うなされることになったのか。これが大げさではないほどの破壊力を持った彼の歌はまさに凶器である。

そんな彼とわたしが知り合ったのは、彼の意外な一言だった。

「お前はアルマ・ファウラーの孫か？」

アルフレートはわたしの祖母であるアルマ・ファウラーと知り合い

だったのだ。彼曰く、わたしと若かりし頃の祖母はそっくりらしい。わたしが驚きながらも肯定すると、彼は何やら嬉しそうにニヤニヤ笑い、それから何かと話しかけてくるようになった。

しかしその後、アルフレートから祖母の名が出てくることはない。わたしと祖母も離れて暮らしている為、アルフレートと祖母のつながりはよくわからないままだ。

我らがアイドル、モロ口族のフロロ・マール。

彼を紹介するにはまず、モロ口族について説明する方が早いだろう。まず目につくのが見た目の愛くるしさである。

身長はわたしの腰あたりまでしかなく、顔も体付きも人間の子供のよう。猫そっくりなフワフワの耳と尻尾は、見た目かわいい、触るとたまらない気持ち良さ。（本人は嫌がる）

モロ口族の特徴は、見た目の可愛さだけではない。彼らの武器は俊敏性にあるのだ。足の早さは数いる種族の中でもトップクラス。加えて手先の器用さも天下一品。まさにシーフになるために生まれてきた種族だ。そんな彼ももちろん所属はシーフクラス。成績もトップを飾っている。

シーフクラスには他にも何人かのモロ口族がいるのだが、彼らの中でもフロロはリーダー的存在なのだそうだ。わたし達パーティの中で唯一まともな人とも言える。

フロロとわたしが仲良くなったのは、今思えばほんの偶然だった。図書室で居残り勉強をしている時、わたしは粗方片付いたレポートを前に大きく背伸びをした。ふと前を見ると、向かいのテーブルで何やら分厚い本と妙な金属片を交互に睨めっこしている人物がいる。それがフロロだった。

何をしているのかさっぱりだったが、妙に気になり見てみると、どうやら本を参考に金属片を分解しているようだ。頭を掻いたり汗を拭ったり、ため息をついたり忙しい彼をおもしろく思い、近づいて

一言、

「そのでつぱり押しながらそこ引つ張つてみたら？」
なんてことを適当に言ってみた。

すると彼の顔がみるみる険しくなりわたしはやばい、と思ったのだ
が、次の瞬間、
かちっ

何かが外れる音が。

「外れた……」

惚けたように彼は呟くと、がばっ、とわたしの手を取り、

「アラームのレベル10を外すことが出来たよ！ありがとう！」

意味のわからないわたしの手をぶんぶん振り回したのだった。それ
からというもの、わたしの周りをつるちよろしているのだ。彼曰
く、

「リジアといると奇跡が降ってくる気がする」
だそうな。

最後になってしまったけれど、わたしリジア・ファウラーについて
今年度からめでたく五期生となったソーサラークラスの15歳。お
しゃれと買物、それに少しばかりのオカルトが大好きな普通の女
の子である。得意科目は歴史。まあ、魔術師に関係ないと言われ
ばそれまでなんだけど……。

ソーサラークラスは魔術師のパーティーにおける役割の性格上、一
般的な知識を身につける、所謂勉強の科目も多い。世界史に関し
てはかなり、教官からも目をかけてもらっているのだ。

苦手科目はなんといっても実技学科。理論の方は着いていけても、
どうも上手くいかない。どうやら術のコントロールがからきダメ
なようで、一般的にコントロールが難しいと言われる術ほどひどく
なる。

ファイヤー・ボールの時間など最悪であった。

わたしが放った炎の光球は、的にまっすぐ飛ぶどころか曲線螺旋を描きながら演習場を漂いまくりクラスメイトを恐怖のどん底へと突き落としたのだ。ようやく着地、発火したのは演習場の壁で、事故防止の為に結界の張られているはずのそれを、大破。消火の為に教官五人が駆け付けける騒ぎとなってしまった。いやはや、自分で言うのも何だが、恐ろしい程の魔力！

……制御出来なきや意味ないけど。

ここまで学園に残れたのも暖かい目で見守ってくれた教官たちのお陰に他ならないだろう。しかし、これからは学園の外にでる機会が増えてくる。ここらで一発奮起しなくては自分の命が危ないのだ。心に闘志を燃やし、頼りになるのかならないのか判らない仲間とともにパーティを組んだわけだ。

その矢先の出来事である。先ほどの冷たい仕打ちは。まあ、教官たちの気持ちも判らなくない。問題児たちの集合体なのである。わたし達は。

在学中はもちろん、卒業後も「プラティニ学園」の名前はわたし達に付いてくることになる。そんな歩く広告塔である生徒に、やれオカマやらコスプレ姿のファイターやらがいたら、学園の評判はどうなるやら不安であろう。しかもなんでよりによって一塊になってるんだよ、おいおい。

？？ってなところだろう。

そんなこんなで冒頭の溜息連発に繋がる訳である。

さて、不毛な話し合いの続きである。

「イルヴァ、本当に友達いないの？ファイタークラスで」

わたしの言葉にイルヴァは答える。

「友達ならいますよ。友達なら」

なら……とわたしが言う前に彼女は続けた。

「ただ、この演習が発表されたら周りから人が消えましたけど」

……仲良くはしてるけど、パーティ組むのはお断りってやつか。

「安心しろ。私は友達もいないぞ」

なぜか自信たっぷりなアルフレートが言い放つ。始めから期待はしてなかったけど。

「ソーサラー、プリースト、シャーマンが二人いてもしょうがないじゃない。やっぱここはファイターが欲しいでしょ」

ローザの言葉に、アルフレートの耳がぴくり、と動き椅子から立ち上がる。

「おい、私をシャーマンの括りに入れてないだろうな？私はバードだ。吟、遊、詩、人！」

シャーマンとは精霊魔法の使い手のことだ。

「はいはい、そのバードクラスだって選択授業の精霊魔術の成績のお陰で進級出来たんじゃない」

わたしが言うと、アルフレートはブツブツ言いながらも椅子に座る。ふふん、言い返せないでやんの。

「フロロは？シーフクラスじゃなくてファイタークラスの友達とかいないの？」

「知り合いはいっぱいいる」

わたしの質問に間髪入れずに答えるフロロ。とことん浅く広くお付き合いするタイプのような。

「でもこのパーティに入れて話したら、みんな断ると思うー」

「どういう意味よ！」

「まあまあ、ローザさん落ち着いてくださいよ。フロロさんの言う事ももっともでしょ」

イルヴァはそう言つてカフェオレを飲み干した。

「今日のところは帰りません？喧嘩しててもしょうがないし。明日まだパーティー組んでない人さがしましょうよ」

イルヴァの言葉にわたしは窓の外を見る。

「ほんと……もう暗くなつてきてるじゃん。帰ろっか。明日がんばろうよ」

そう言つとみんなも頷いた。嫌なことは先送り、という訳ではない。何しろこの演習の話しがでたこと自体がつい一昨日のことだ。まだあぶれてる人間なんていっぱいいるさ、という考えからわたしはそこまでの焦りは無かった。

ただ、わたしは分かつていなかった。こんな自分たちでさえ、いつもの仲良し組と組んで5人揃った状態であること。普通に考えればその他の何の問題もない健全な生徒であればわたし達以上に友達が多く、メンバー集めも苦労していないという事に。

「じゃ、明日ね」

ローザが手を挙げ、わたしもそれに答える。辺りはすっかり夕方の紅に夜の藍色が降り掛かっている。

ふー……

学校の裏門のすぐそば、わたしが通学に使うバス停のベンチに腰掛け、大きく息をついた。明日から聞き込みが始まる。がんばろう、何て言つてみたもののがんばってどうにかなるものなのか。がんばる方が周りに迷惑がかかる気もする……。

正直教官に「ノー」を言われるまでは、わたしは軽く見ていた気がする。自分たちが思つていた以上に教官たちはわたし達を問題視していたわけだ。

はー……

もう一度息をついた。その時だった。

どさり、とベンチにかかる振動。ふと横を見るとわたしの隣に腰掛ける人影が一つ。手元には大振りの剣が鞘に入って置かれている。その人物は、肩あたりまで伸びた銀髪に青みがかったグレーの瞳をしている。灰色のジャケットを着込み足下は黒のブーツ。

それが誰なのか確認すると、私は息が止まりそうになった。

ヘクター・ブラックモア。

我が学園の隠れ人気キャラで、美形でもの静かだが男気溢れる雰囲気を持ち、背は高く優しい口調の王子っぷり。いつも周りには女の子、といった判りやすいモテ男じゃない分、本気で想ってる女子は多そうだぞ！という、彼。恥ずかしながらわたしの憧れの人、その人じゃないか！なんせ話したこともない、一方的に知ってるだけの人。いつもはこんな時間になったら同じバスになることはなかったんだけどなあ。

嬉しい誤算……というところだが、如何せん距離が近すぎる！こうなると髪の毛一つ動かす事も困難になる。息も苦しい。我ながらうぶで恥ずかしいが、ソーサラークラスは女の園なのである。ましてやこんな男前キャラなどいないのだ。隣りに座っているだけで緊張の極地になるのも仕方が無い。誰か、この状況をなんとかして……。ここで「よく一緒になりますね」なんて声を掛けられる勇氣があるなら、とつくの昔にやっている。でもそれってどんだけ恋愛上級者なのよ！

緊張のピークでわたしが荒い息を شدした時だった。道の向こうから、乗り合いバスを引っ張るコルバインの足音が聞こえ出した。地鳴りのような響きをさせて、巨大な馬のようなコルバインはバス停前に止まる。助かった……。息を吐き出し、わたしは車体に入り込んだ。もちろん、ヘクターの後ろから。なぜなら見るのはいいが、後ろから見られるのは恥ずかしいのが乙女心。まばらに乗っている乗客たちを見回し、開いてる席を探す。二人掛けの椅子が左右に2

列、前を向いて間に通路を挟んでいるタイプである。

何気ない振りでヘクターが席に座る姿を認めると、わたしは一席置いた斜め後ろの席を陣取る。こうしておけば素敵なお姿を目に入れられるというもの。声をかける勇氣はないが、見つめるだけでも幸せ！という乙女心が産んだ技である。あとはこのテキストの詰まった重たい鞆を頭上の網棚に置けばオッケー。やや小柄なわたしには骨の折れる作業だが、膝にずっと鞆を抱えているのも苦痛なのだ。気合い一つ、わたしが皮の手提げを頭の上に持ち上げた時だった。ひよい、と後ろから荷物が持ち上げられる。

は？

振り向くと、ヘクターがさした苦労もなさそうにわたしの鞆を網棚へと乗せる。ああ、まじかで見ると本当に背高なんだなあ。思考停止に近いわたしは、そんなどうでもいいことを考えていた。

「毎日大変そうだね」

ヘクターが爽やかな笑顔をわたしに向ける。

「おにいちゃん、やさしいなあ」

そばにいたおばさんがにこにこと言った言葉に我に帰ったわたしは、慌ててお辞儀した。

「あ、あ、ありがとう」

「いえいえ」

席に座った後、わたしはどっと吹き出す汗と、体中が真っ赤になるのを感じた。

バスの中からぼんやりと、ヘクターが歩いて行く姿を見送った。わたしが降りる停留所はもう少し先。バスが同じになる日は毎日、こうして彼の姿を溜息と共に見送っていたのだが……。

今日は一味違うんだぜ。

ついさっきの出来事を思い出し、再び赤面するわたし。

「毎日大変だね」

彼はそう言ったのだ。

「毎日」「まいにち」

そう、それは彼がわたしの存在を知っていたということに他ならない。ますます顔が赤くなるのを感じながら、わたしは独り言をつぶやく。

「学校行つてて良かった……まじで……」

入学から五年目にして初めて心から呟いた言葉だった。

暫くして自宅付近の停留所に着く。降り際には、やたら大柄なおじいさんに鞆を下ろしてもらった。

「おねえさん、小さいのに大変だね」

の言葉に違う意味で赤面したのは言うまでもない。

次の日の授業中、わたしは窓からグラウンドを眺めていた。授業をちゃんと聞きなさい、と言いたいだろうが今は自習時間である。

グラウンドにはファイタークラスの爽やかな面々が実技練習を行っているのだが、組み手をやっている人もいれば周りで声を出し見学する者もいる。それら全てが例外なく爽やかな眩しさを放っているのだ。イルヴァのクラスではないようだし、残念ながらヘクターの姿も見えない。が、わたしにはファイタークラスの人達というだけで汗まで輝いているように見えた。

「うっ、なんて違いなの……」

わたしが思わず涙した時である。

「何ブツブツ言ってたんだ！」

ぱこんっ、と頭をはたかれわたしは振り向く。

「……出たな、ガリ勉野郎」

「あ！？何だつて？」

我がクラス一の秀才くん、ロレンツくんである。例に漏れず真っ黒なローブで全身を包んだ彼は腰に手を当て怒り出す。

「お前外見てる暇あつたらレポート書けよ。お前ただぞ、出してないの」

「ちゃんと昨日やってきたわよ」

ブー垂れながらわたしは鞆から用紙の束を出す。

「はい、『ワイト王国とレエ男爵についての考察』。完璧よ」

ロレンツはぱらぱらとめくると感嘆の声を上げた。

「おお！さすが！オカルトな歴史になると違うな！」

「ほほほ、気合いが入りすぎて遅くなったのよ」

ノリで高笑いをしてみたものの、やっぱり悲しい……。

このローブで真っ黒な教室を見てわかるように、やっぱりソーサラークラスは独特な雰囲気なのだ。会話といえば黒魔術についてやデ

「モンの話など、どうしても「コアな」話になってしまふ。わたしがロレンツに胸張りつつ渡したレポートの主題となつたレエ男爵も「夜な夜なあんなことやこんなことやつて変態ぶりを発揮しただけで無く、本気で金を作るべく錬金術にはまつて怪しい儀式で悪魔を呼び出し、その悪魔に食われちゃつた」人物である。

そう、オタクが集まるクラスなのだ。

同じ魔術師クラスのプリーストクラスやシャーマンクラスならまだしも、必然的にファイターなどのクラスとは疎遠になるのだ。わたしがファイタークラスの爽やかな笑い声に惹き寄せられるのもしよ
うがあるまい。

「そういえば、お前らまだ教官の『承認』もらってないんだって？」
ロレンツは「やっぱりな」的な顔をしつつ聞いてくる。

「う、うるさいわね。そういう自分は……と、そっか……」

わたしは抗議の声を途中で詰まらせる。彼、ロレンツは「研究科」に行く事が決まっている。しかしそれはわたし達が昨日言われたよ
うなのとは逆の理由で、研究員たちからのスカウトを受けてのこと
である。ロレンツ自身も冒険活劇をするより研究に没頭する方が魅
力的らしく、早々と進路が決まっているのである。

「早く決めた方がいいぞ。パーティが承認つけた奴らは明日から出
発らしいし」

「ええええええええ！！どいうこと！？」

わたしの驚きに面食らいつつロレンツは続ける。

「だから、教官の許可もらった奴らから順に、依頼を選んで出かけるんだよ。そのスタートがもう明日からなの！」

わたしは言葉を失う。そういえば「演習」っていつから、って言うわね。覚えてなかったような……。こういうことだったのか。

「そ、それって」

「そう、遅れれば遅れるほど選べるクエストも減るわけだし、依頼完了も遅れるわけだから……まあ、不利だわな」

不利、というのはやっぱり成績に響くということか……。毎年ぎりぎり

りの単位で進級しているわたしにとっては非常にまずい。わたしだけでなく、たぶんアルフレートもまずい。日頃から教官たちが『人間関係を円滑にするのも冒険者の基本!』と言っていたのも今回のような時を考えての事だったのか。

「おのれ、プラティニ!余計なことを!」

「なにわけわかんねー事言っただよ……」

拳を握りしめるわたしにロレンツは溜息をついた。

「なんですってええええええええええ!!」

ローザがお弁当のタコさんウインナーを刺したフォークを握りしめ叫ぶ。

「それって本当なんですか?」

イルヴァがいぶかしげに訪ねる。本日の衣装はヒョウ柄のビキニに角の付いたカチューシャを頭につけている。この格好で授業受けるんだらうか……。

場所は4階の渡り廊下。最上階にあるここは屋根がなく、スペースも広めで日当たりがいいので、シートを敷いてランチを取る生徒も多い。今日はわたし達三人の他は二組程、輪を作って食事を取っている。

「本当だと思う。教官お気に入りのロレンツ情報だし」

わたしが唐揚げを食べつつ言うと、ローザは呟く。

「あいつね……。これじゃあパーティ決まってる優秀な奴を無理矢理引き抜くっていうのも出来る時間の余裕無いじゃない……」

そんなことを考えてたのかい。

「困りましたねー。私、ファッションが気に食わないとかで、あんまり教官の評価高くないんですよー。成績が落ちるのは困りますー!」
イルヴァが首を振り振るする。

「やめりゃあいいでしょが、そんな格好。あたしなんてね、毎年『優』が付いてたのよ!その記録が無くなるかもしれないじゃない

！」

「ローザちゃん成績は良いもんねー」

わたしの言葉にローザは頬を引きつらせた。

「成績『は』ってなによ、『は』って」

「悠長にしていられなくなった、ってことは確かだな」

後ろからした声に振り向くと、りんごを齧るアルフレートの姿。彼はわたしの隣に座ると、わたしのお弁当箱の蓋にりんごの芯を捨てた。

「そうなのよ。こうなったらかたっぱしから聞いて回る方が良いと思う。選んでられないよ」

わたしは言いつつ、芯をアルフレートの膝に突き返す。

「選んでたんですか？リジアってば」

イルヴァが今度は彼女のお弁当の蓋へと芯を突っ込んできたアルフレートの顔に芯を投げ返しつつ言う。

「ありがたいことだね。我々はリジアには選ばれた存在なわけだ」

皮肉たつぷりにアルフレートは言いつつ、今度はローザのお弁当へと芯を投げた。ぼとり、蓋ではなく、お弁当箱本体へとりんごの芯は落ちる。ローザがわなわなした。

「きゃー！！もう食べられないじゃない！」

「私は病原菌かー！！」

「もーうるさいなあ。とにかく、片っ端から聞いてくるわ！」

そう言つてわたしは立ち上がった。気付くと周りにいたはずの生徒が消えていたりする。わたし達の話題を聞いて逃げたか。

うーん、やっぱり敬遠されてるね！

改めて自分たちの嫌われっぷりを確認し、わたしは涙を堪えた。

「まだパーティー組んでない奴ねえ」

ファイタークラスが入っている西の建物に入って出会った一人目の人物、赤毛のクリスピアンくん。

彼の事はわたしも知っていた。イケメンで腕も立つ、なかなかの人物である、らしい。なんせ腕前に関しては噂でしか分からないからだ。授業風景はいつも覗いているものの、魔術師であるわたしには腕の差なんてよく分からないというのが本音だ。重い武器を振り回しているだけで充分凄いと思うし。

さて、目の前のクリスピアン君、目立つ存在なゆえ友達も多いようなタイプだ。彼を見つけてとりあえず聞き込み開始。別に彼がパーティに入ってくれなくとも情報が聞ければ十分である。すなわち、彼の友達ならそれなりの人が多いはず。嫌らしい考えだが人間、自然と同じようなタイプが集まるもんなのだ。

「意外と多いぜ。俺の周りじゃ」

返ってきた答えはまさに意外なものだった。

「え？ そうなの？」

わたしが驚いていると彼は頷き、腕を組んだ。

「結構選り好みしてるやつが多いからなあ。俺の友達なんかでも、何組も断ってたぜ。なんでも『入れてもらおうと思ってる』ところがあるから』とかなんとか」

うーん、うらやましい話である。

「ファイタークラスだと魔術師クラスの知り合いがない奴って多いからさ。ほら、建物も違うし」

「なるほど……」。けっこう同じ悩みの人もあるかもね、わたし達と「そういうこと。だから良い方だよ、メンバー5人まで決まってるんでしょ？」

クリスピアンの笑顔に、わたしが頷いた時だった。

ぶわっ！

黒い影がわたし達二人に覆いかぶさる。

「え？」

わたしは頭上を見上げた。飛び込んできたのは二つの影。次の瞬間、
「うおわ！！！！」

クリスピアンの絶叫が廊下に響き渡った。足下の光景に啞然とした
後、立ちくらみがする。

「何してんのよおおおお！！」

絶叫するわたし。目の前には巨大な虫網のようなものを地面に振り
下ろしてがっちり押さえこんでいるアルフレートとフロロの姿。
網の中ではクリスピアンがもがいている。

「な、なんなんだ！？」

「ふふふ……、我々は君を拉致しに来たのだよ。おとなしく我々の
パーティーに入るんだ」

恐ろしいことを言いつつクリスピアンに近づくアルフレート。

「何言ってるのよ！無理矢理すぎるでしょ！っ！かなんでフロロま
で手伝ってるのよ！」

「楽しそうだから」

さらりとわたしに答えるフロロ。こ、こいつ。ある意味アルフレ
ートより性質が悪い。

「リジア、お前もよくやったぞ。よくこの男の気を削いだ」

「共犯にするな！さりげなく！」

アルフレートの頭をはたくわたし。クリスピアンといえば、あつけ
に取られていたがようやく、もそもそと網からはい出してきた。

「ご、ごめん。俺はもう無理だよ。決まってるんだ。メンバーが」
律儀に答えてくれるクリスピアン。いい人だ……。

「ちっ、なら貴様にもう用はない。行くぞ！フロロ！」

悪役でしかない台詞を吐きつつアルフレートは網を掴むとフロロを
手招きする。割とあっさり退くを見ると完全に遊び目的なのが伺
える。

「ちょっと！待ちなさい！」

わたしが叫ぶもむなしく、次の瞬間には二人は消えていた。くそー、さすが妖精コンビ。足が早い！後はむなしく風が吹くのみ。

「……君も大変だね」

クリスピアンの同情の声に、わたしは涙を浮かべつつ頷いた。

あれから何人の生徒を悪の手先？？もといアルフレートとフロロの手から逃がしただろうか。

「ったく、何てことしてくれんのよ、あの馬鹿ども！」

わたしが応援に呼んだローザが怒りの声をあげる。

「こんなことしたら、入ってくれるものも入ってくれなくなるわよ。大人しくして騙した方が良いに決まってるじゃない。ねえ？」

「騙すんじゃだめでしょ、ローザちゃん……」

わたしは突っ込みつつ、辺りを見回す。とりあえず全体を見回そう、とグラウンドに出てきたは良いが、二人があまりにも神出鬼没なことに、わたしもローザも疲れてきた。何時の間にやら目的が馬鹿二人を探すことに変わっているし。

「もう！休み時間も終わっちゃうわよ。まあ、授業始まれば流石に馬鹿なことやめるでしょうけど……」

「ローザちゃん！あっち！」

わたしはローザの袖を引っ張りつつ、ある方向を指差す。グラウンドの隅にある第二演習場の屋根の上、こここそと歩く怪しい影二つ！なぜか上空から網を振り下ろすことに美学を見いだしているようである。

「あそこね！」

ローザが駆け出す。わたしも後を追いつつ、下にいるのであろうターゲットに目を移す。

……

一瞬息が止まった。最悪の展開である。昨日、一瞬天に昇ったわた

「どうだ、大人しく我々の仲間にならないか？」

わたしの言葉を無視してアルフレートは続けた。心なしか台詞は棒読みである。さすがに動揺しているようだ。

次の瞬間、わたしは一生で一番耳を疑う台詞を聞くことになる。

「いいよ」

?? …… はい？

ヘクターはゆつくりと網をどけると、立ち上がった。何故かこの状況の中で笑顔である。

「いいよ。君らのパーティに入れてくれ」

しんっ ……、沈黙が広がる。

「……あれ？だめだった？」

ヘクターの言葉に、全員がブンブン！と首を振った。わたしは頭の痛みも忘れ、この展開にただただ啞然とするばかりだった。

山脈の休憩地、チード村

馬車は揺れるよ、どこまでも。というわけで外へと飛び出した我々は、いざ初冒険の地へと向かうべく馬車に揺られていた。暫しのお別れ、ウェリスペルトの町。

「おやつ持ってくれば良かったですう」

イルヴァがぼやく。ローザが投げた何かが馬車内を飛んでいく。イルヴァは器用にそれをキャッチした。

「家の姉様が焼いたクッキーよ」

「ありがとうございますう」

緊張感がない雰囲気の中、わたしはだんだん建物が少なくなる通りを見て、旅の出発を囁み締めた。

あの後、イルヴァも混ぜての話し合いがわたし達5人とヘクターで行われた。

「もの好きな方だったんですね、ヘクターさん」

大変自覚ある台詞を言うイルヴァ。同じファイタークラスでも違うクラスらしいが、イルヴァもヘクターを知っていた。

「ほんとよねえ。あんたぐらいだったら他にあったんじゃないの？誘いがさあ」

ローザも腕を組みつつ頷く。

「いやあ、見る目があるんだよ、彼には」

上機嫌なのはアルフレート。まあ、彼のお陰、とも言えなくはない。ヘクターはというと、にこにこみんなの話を聞き、口を開いた。

「いや、こんな魅力的なパーティはないと思うよ」

こんな台詞でもおべっかに聞こえないのが彼のすごい所。それを聞き、五人の顔が緩む。

『そ、そうかなあー』

ヘクター以外の全員の声が重なった。

ヘクターを加えた効果はすごかった。彼を加えたメンバー表を教官に見せた瞬間、教官の顔が「ほほう」といった具合に変わり、一発で『承認』の判子を押されたのだ。

生徒たちの反応も凄かった。ひっそりなしに「どうやって彼を引き込んだんだ」といった質問が舞い込み、わたしのロッカーには血文字で「呪う」の文字があつたりした。うーん、爽快爽快。

どうやらヘクターは、わたしが考えている以上に教官、生徒たちともに評価の高い人物だったようだ。

次の日からは依頼選びに全員のスキル確認やらミーティングやらで忙しかったが、初めてヘクターと会話出来ることにわたしの気分は最高潮！と浮かれている時だった。

「勇気あるわねー、あんたたち」

そう言ったのはわたしのクラスのキーラだった。彼女はどこか大人の雰囲気が漂う女の子で、どこか一步引いてみんなを眺めているタイプだ。なぜかわたしも気が合うので、クラスではわりかし仲がよい方であつたりする。

「勇気って？」

「いやあね、知ってるくせに」

そう答えるキーラは女のわたしが見てもドキドキするほど色っぽい。「ヘクターって人、大分色んなところから勧誘があつたみたいだから恨まれないようにね」

キーラはふふふ、と笑ったのだった。ああ、学校帰ってからが怖い……。

「リジア！見て見て！ほら、学校が見下ろせる！」

ローザがはしゃいだ声をあげる。馬車はアルフォレント山脈に入る

うというところである。アルフォレント山脈はローラス共和国のほぼ中央にある。標高は大したことはないが距離の長い山脈だ。山道に入ったところで、わたし達の学園のある、ローラス共和国の一都市ウエリスペリトの街が見下ろせるようになっていいるのだ。

「風が気持ちいいですねー」

イルヴァも窓から顔を出す。本日の格好はタンクトップにホットパンツ。レザーアーマーを着込んだその姿はかなりまともだ。本人曰く「アマゾネスルック」といつていたが……。さすがに止められたな……。コスプレ。誰に言われたのかは知らんが。

「ほんと、いい日和りで良かった」

わたしは呟きつつもちらり、後ろへ視線を移す。ヘクターが外の景色を見ながら微笑んでいる姿があった。

わたしは？？気になっていた。ヘクターはわたし達のことを「魅力的だ」と言った。わたしには……。イマイチ彼がそう言った理由が判らない。もちろんわたしにとっては大事な仲間だけど、なんというか意外だったのだ。彼がそう言ったのが。わたしは長い間、ヘクターに憧れているだけだったけど、その期間もここ数日で会話をするようになつてからも、彼の印象は変わらなかった。

つまり、彼はいい人なのだ。そんな彼がわたし達のことを「魅力的だ」と言ったことは嬉しくもあり、意外でもあった。どう考えてもいつも彼の周りにいる人たちとわたし達とは雰囲気が違うのではないか。期待を裏切りたくない。良いパーティだと思つてほしい。常にそんな風に考えてしまう。そんなわたしの気持ちも知らずにアルフレートは、

「一曲歌おうか」

などと言いだす。

「止めて。耳が腐る」

ローザにぴしゃりと言い放たれ、アルフレートはむつつり押し黙つた。

荷馬車を改造した、お世辞にも乗り心地が良いとは言えない小さな

馬車に揺られてお尻がいい加減痛くなってきた頃、

「そろそろ着くよ」

学園から派遣された御者さんが馬の手綱を握りながら言った。

「おじさんはすぐに帰るの？」

わたしの質問に肩をすくめる。

「学校側からお使いも頼まれてんだ。買い物したらトンボ帰りさ」
それを聞いたローザが顔をしかめる。

「じゃあ帰りはバスかなにか探さなきゃ」

バスといえば一般的には馬より大型の生き物「コルバイン」一、二頭に二階建ての車体を引かせる大型の乗り物である。今乗っている普通の馬車に比べて乗り心地は良いし、何より早い。しかし今から向かう「チード村」はかなり規模は小さいし、途中は全て山道だった。バスのような乗り物は期待出来そうにない。

「チードってどんなところですか？」

「冒険者たるもの、自分の目で確かめなきゃ」

イルヴァの言葉におじさんはニヤリと笑い、前を指差した。山間にぼつぼつと立つ建物が見え始めた。わたし達が向かうチード村である。

「結構栄えてんじゃない」

ローザが感嘆の声をあげた。

そう、チード村は村とはいいいながら商店街に店が並び、人の通りもウェリスペルトに比べれば寂しいが、まずまず賑わったところだった。きっとアルフォレント山脈を越える旅人の休憩ポイントになっているからだろう。

御者のおじさんと別れ、予定より早い到着となったわたしたちは「まずは腹ごしらえを……」と適当な店を探して歩く。

ここでわたし達が受ける依頼について説明すると、今回は依頼とはいえやっぱ「演習」なのである。学園の生徒がテストでやるという意味合いの方が大きい。しかし演習で生徒たちが行う依頼は全て実際に学園に來た本物の依頼だ。いつもは若手の教官や教育課程を終えた五、六期生がさばいてる依頼を、簡単そうなものを選び分けてわたし達が「演習」として行うのだ。依頼人には許可をとってあるし、実際現地にも教官たちが一度足を運んでいる。まどろっこしいやり方をとっているが、そこは「未来の冒険者」たちのため。一般の方たちも協力的なのがうれしいことである。正規の冒険者に、ではなく学園にわざわざ依頼をよこす時点で大した依頼はないのだが。それでもお使いなどの簡単かつ面倒な依頼は嫌がる冒険者が多いので、学園を重宝している人も多いのだ。正規の冒険者を雇うよりもずっと安上がりというのが一番の理由かもしれないが。

わたし達が選んだ依頼は、やっぱりお使い。ここチードで研究をしている科学者、という人の研究材料の調達である。選んだ理由は単純に科学者という存在が珍しく、興味を引かれたからだった。

一件の大衆食堂を見つけ、そろそろと入る。白いエプロンを着けた元気いっぱい！という言葉がぴったりな若いウェイトレスが近寄ってきて、大きなテーブルを案内してくれた。

各自思い思いの飲み物を頼んでいると、アルフレートがウェイトレスの女の子に訪ねる。

「バレットという研究家の家を知っているか？」

わたし達が向かうべき依頼人の家のことである。一瞬、女の子に戸惑いの色が見えた？ 気がした。

「バレットさん？ この店の前の大通りを北に向かうと村のはずれに
でるから、そこにある大きな屋敷だからすぐわかると思うわ」

戸惑いの色は気のせいだったのか、にこやかに答える。

「さーと、何食べよっかなー」

ローザの声にわたしは我に返りメニューに目を落とした。考え過ぎ
かもしれない、そう自分に言い聞かせながらわたしはお腹を満たす
メニューを選んでいく。いつもよりがつつかないようにしなきゃ、
とヘクターの顔をチラ見しつつ考えた。

「あんまり評判が良くない人間かもしれないね」

運ばれてきたメニューにみんなが口をつけ始めた時だった。ヘクタ
ーの言葉に手が止まる。先ほどのウェイトレスの反応からだろう。

「えー？ 何か聞いたんですかあ？」

イルヴァが海老フライを頬張り、聞き返す。

「いや、さっきの子に聞いてから周りの様子がちょっと、ね」

ヘクターに言われて、何気なく回りをみると、何やらこつちを見な
がらこそそそと話す客や従業員の姿。躰がなつとらん。

「何か同情の視線を感じるんだけど……。口うるさい人だったら嫌
ねえ」

ローザが顔をしかめる。

「……何、依頼の中で嫌みのひとつも言われることもあるかもしれ
んが、私が言い返してやるさ」

そう言ってアルフレートはピクルスを口に放り込んだ。彼の場合、
本気で相手の心臓を突き破るような嫌味を言いそうで少し怖い気も

する。

しかしここまであからさまに町の人から嫌われるバレットさんとはどんな人物なのか。わたしは自分の趣味の影響か、ほとんど人間離れたバレットさん像が浮かんでくるのを頭を振って消し去ることにした。研究者なんてどういうジャンルであれ、変わった人が多いものだ。それできつとお友達が少ない、なんていう話だろう。

「おねえちゃんたち、バレットのところに行くんだって？」

料理の半分程を平らげたわたし達に声を掛けてきたのは、隣のテーブルで一杯ひっかけていたおやじ。

「そう……ですけど、何か？」

ササミのチーズフライを飲み込み、わたしは答えた。

「何しに行くのかしらねーけどさ、気をつけた方がいいぜ」

そう言っただけを一口。

「気をつけるって……何か問題でもある人なの？」

ローザが聞くと、おやじは顎を撫でて考える。

「問題っていうか……。あんまり良い噂がないことは確かだな」

「悪い噂はあるんですね？」

イルヴァがずばり聞く。

「うーん……」

臭わせる割にはつきり物を言わない人だ。

「俺達バレットって人から依頼受けてて、今から会いに行くんですよ。何か知ってたら教えて欲しいんですが」

「あんまりおすすめしないな」

ヘクターの質問に答えたのは、空いたお皿を下げにきたウェイトレスの女の子だった。

「正直いつてどういう人なのか、村の人もよく知らないのよ。ある日突然、だったしね、村に住み着いたのも。結構前になるけど未だに村には馴染んでないし」

横でおやじも頷く。

「さっぱり姿は見せねえわ、しょっちゅう屋敷からでかい音が聞こ

えてくるわで気味悪いしよ。何の研究してるのかもわかんねーしな。噂じゃ人体実験してるなんつー話もあるし……」

「人体実験!？」

わたしは思わず大声を上げる。オカルト好きの血が騒ぐのもしかたあるまい。ただ勘違いしないで頂きたいのはわたしはそういう類いの話が好きなだけで、実際にマッドサイエンティストといわれる人物が目の前にいたら……やはり嫌悪感は覚える。決して『うひょー、わくわくしてきたぞ!』という反応から叫んだのではない。

わたしの反応に女の子は手をぱたぱた振った。

「噂よー、うわさ。なんかね、バレットさんの家に入ってく姿が最後になって行方不明になってる人達が結構いたりするのよー」

そ、それって……結構大事な気がするんだけど。軽い言い方といいこの人達も普通の感覚じゃないような。

「な、なんか思わぬ方向に話が進んできたわね」

ローザが呟く。

「これって……学校側も知らない話、よね？」

おやじとウェイトレスが去ったを見て、わたしはローザに言った。

「さあ？」とローザは肩をすくめる。

「そこまで含めての学園からのテストだったら、どうする？」

「私、仲良い先輩方からお話聞いたんですけど……、単なるお使いレベルのクエストしかなかったって話でしたよ？演習段階じゃ。だからそんなややこしい話じゃないと思いますけど」

イルヴァの言葉にアルフレートは驚きの色をみせる。

「な、仲良い先輩なんているのか？その……お前が」

言いたいことは何となくわかる。しかしイルヴァはしれつと言い返した。

「ええ、主にコスプレ関係の」

なかなか奥の深い世界である。

「ま、当たって砕けろとは言わないけどさ、放棄するわけにもいかないしね」

「あんだわくわくしてない？」

明るく言ったヘクターに、ローザは呆れた声を出した。

「だから、このメンバーじゃ普通に事が運ぶわけないんだって」
にやにやしながら楽しそうに言うフロロにわたしは深く溜息をついた。

「わたしは普通に運びたいわよ……」

「ここだな」

村はずれの一軒家を前に呟いたのはアルフレート。わたしは頷いた。しかし……、予想以上に大きい建物である。わたしも都会と言われる街生まれの都会育ち。こういう山間の村は人口が少ない分、都会よりは家一軒の大きさが大きいのはわかるのだが……。「大きいお屋敷」のレベルを超えてる気がする。周りを高い石壁に囲まれ、家本体はつたに絡まれている。窓は少なく、まるで巨大な箱がぼすんと落ちてきたような印象だ。

「これを押せばいいんじゃないかな？」

ヘクターが門の左右にそびえる石柱、その右側についたスイッチのようなものを指差す。見ると「御用の方どうぞ」の文字。

「あ、それよ。押せば中でチャイムがなるから。うちにもついてる」ローザが頷いた。さすが、というべきか。ローザの家はかなりのお金持ちである。こういう庶民には縁のない物に異様に詳しくったりするのだ。

「どういう仕組みなんですかあ？」

イルヴァの問いにわたしが答える。

「簡単な魔法装置の一種よ。まだローザちゃん家とかここみたいに声が届かないような大きい家しかつけてないけどね」

もつともそういう大きな家には大抵使用人がいたりするので、そういう面でもこの道具は普及していなかったりするのだが。町の人の話しからして、てっきり人嫌いで家に籠っているタイプの人間かと思っていたら、訪問客の為にこんな物を取り付けていたりとよくわからない人だ。

「じゃ、押すよー」

いつのまにかヘクターに肩車されたフロロがスイッチを押した。押してもこちらには何も聞こえないが、中では来客を告げる音が響き

渡ったはずである。

数秒たった時だった。

ぎい　ぎい　ぎい

金属音を立てて黒い大きな外門が動き出す。

「すごいですー」

手を掛ける人間がいはいはずの門が開いていく様子に、イルヴァが感嘆の声を出した。どこか薄暗い屋敷の前に一同は顔を見合わせる、門の中へと足を進めた。屋敷の大きさの割には短い前庭を通り、大きな扉の前に立ち止まる。立派な玄関の扉の前に少し躊躇していると、わたし達がノックするより早く、静かに開いた隙間から一人の人物が中から顔を出す。

「どちら様ですかにや？」

わたしはその人物をみて一瞬驚く。猫である。フロロと違って耳やしっぽだけでなく、顔も体もねこ。二足歩行している猫そのもの。

普通の猫より大きくて、フロロと同じぐらいの身長だが、服を着ているわけでもなく茶の縞の猫。フワフワの体毛に大きな目、小さな手はどうやって扉を開けたのか不思議に思う程、猫のまんまだ。

同じように面喰らってるヘクターだったが、すぐに我に返ったらしく猫に挨拶をした。

「こちらのバレットさんがプラティニ学園に依頼を出されたと思うのですが」

猫はそれを聞いて大きく頷く。

「ハイハイ。学園の方ですね？お聞きしておりますにや」

最後の「にや」に悶えそうになる。いかん、かわいい。

「そうです、学園からきました」

ヘクターが言うと、猫は扉を大きく開けた。

「どうぞ、中へ。旦那様を呼んできますにや」

入るとエプロンを着けたもう一人（？）の猫。こっちは耳と手足だけ黒い白猫。

「にゃんが旦那様を呼んでくるにゃー。君はこの方たちを応接間へ」

茶虎に言われると白猫が頷く。も、もしかして「にゃん」は「私」とか「僕」の意味だろうか。かわいい！かわいいすぎる！

「なに身よじってんのよ、あんた」

「だって予想外の展開で……」

ローザの突っ込みに答えるわたし。

「こつちですにゃー。着いてくるにゃー」

白猫の言葉に6人はそろそろと廊下を歩いていく。ぽてぽてと前を歩く白猫の姿にすっかりわたし達の雰囲気は和んでしまっていた。

「歩いて来たんですかにゃ？」

白猫に聞かれ、わたしは首を振る。

「村までは馬車で……」

「馬車はお尻が痛くなるにゃー」

猫でもそうなのか……。いや、猫ではないのか？

しばらく歩くと、ある一室に通された。窓は少なめだが、手入れの行き届いた広い部屋である。中央に大きな大理石のテーブルが置かれ、隅には大きなソファもある。花が飾ってあったり、クロスやカーテンの趣味も良い。窓が少ないからか、天井からは明かりの魔法『ライト』を封じた魔導石らしきものがいくつもぶら下がり、そのいずれも趣味の良いランプシェードがかけられていた。促されるままにテーブルにつく。

「今お茶入れるにゃー。旦那様もすぐ来るにゃー」

白猫がぱたん、とドアを閉めると、すぐに隣の部屋から物音がする。「にゃー」だの「なおーん」だの、食器のかちやかちやいう音もする。どうやら給湯室があるらしい。数匹の猫のあわただしい声がするのだ。

この時点でわたしはこの家の嫌なイメージなど吹き飛んでいた。

「君らが『たまご』たちかね。よろしく頼むよ」

わたし達がお茶を飲みつつ待っていると現れたバレットさん本人も、研究者特有の変わり者の雰囲気は醸し出しているものの、柔らかい顔つきをしていて良い人そうであった。歳は60を超えるぐらいか。白髭で顔を覆い、頭は寂しくなっている。青いローブを着ている姿は魔術師のようにも見えた。『たまご』とは、学園外の人がよく使う、わたし達のような学生の愛称だ。

「君たちを呼んだのはね、私の研究に必要な材料を取ってきてもらおう思ってなんじゃが」

そこまで言くと、バレットさんは髭をさすりつつわたし達を見回す。「ところで、君らのリーダーは？」

誰に向かって話しをするべきか迷ったようだ。リーダー……。そういや決めてなかったな。教官にも『決めておけ』と言われていたのに忘れていた。わたし達は顔を合わせ、次の瞬間ローザがヘクターを指差す。

「この人です」

「……ええええ!!」

ヘクターは狼狽しメンバー一人一人の顔を見るが、全員が目をそらした。

「ちよっ……。と、とりあえず、……。それでいいです」

何やら文句を言いたげだが、この場でもめても仕方ないと思ったのであろう。

「そうかそうか。良い顔しとるもんな。??でだな、話の続きじゃが、その材料というのが「ポゼウラスの実」でな」

ポゼウラスの実。わたしも魔術を習う身である。その名前は知っていた。光を好まない植物、しかしながらある程度の温度湿度が必要な生体で、それゆえ洞窟などに生える珍しい植物である。洞窟とい

えば野良モンスターの巢になるのが世の常。そのため依頼してきたのであろう。

「その姿がわかる方はいるかの？」

わたしとローザ、アルフレートが手を上げる。わたしは図鑑で見ただけの知識だが。

「よしよし、なら大丈夫じゃの。で、この村から半日程の所に自然洞窟があるんじゃが、その奥に生えてるはずじゃ」

「今までもそこで調達を？」

アルフレートの質問にバレットさんは頷く。

「ここに来て何年になるかわからんが、ずっとじゃ。今までは流れの傭兵に頼んでいたんじゃが、欲しい時期に丁度よく流れの傭兵が村にいるとは限らなくての。今回初めて学園に依頼したんじゃよ」

「じゃあ最後に頼んだ傭兵が、根こそぎ取ってない限りはあるはずだ」

アルフレートが一人呟く。彼がしつこく聞くのには訳がある。ポゼウラスはその珍しい生体ゆえ、あまり見かけることがない。ここがないから他を探そう、とはなかなかいかないのである。自分たちの非がないとしても、行ってみてありませんでした、では後味悪い。

『見つけてくるまで探し回れ』なんてことも人によつては言い出すかもしれないし。

「乾燥して使うんですよね」

わたしが聞く。バレットさんは満足そうに頷いた。

「そう、よく知つとるな、お嬢ちゃん。だから持てる限り持つてきてほしい。ただし、後先のことを考えて根は残してきてくれよ。根が残ればそこからまた成長するじゃろうからな」

今日はもう夕方手前ということもあり、そのままバレットさんの家に泊まることになった。用意された部屋は二つ。男女に別れ、わたしとイルヴァ、ローザが同じ部屋へ入って行ったときは猫たちも不

思議そうな顔をしていたが、ローザのしゃべる姿を見て何やら納得顔になっていった。物分かりのいいこ達である。

部屋は広さもベッドの柔らかさも申し分ないものだった。一つ気になるのはやっぱり窓が少ないこと。明かりを取り入れる為に上の方に横長の窓があるだけである。

「何か拍子抜けよねー」

ベッドにうつぶせに寝転んだローザが枕に顔をうずめ、唸る。

「うんうん、特に問題のある人にも見えないけど。付き合いが薄いだけなのかもね、村の人と」

わたしの言葉にイルヴァも頷く。

「田舎特有の陰湿さなんですよ」

……それはちよつと同意しかねるが。

とんとん、と遠慮しがちなノックの音がする。

「はい」

わたしは扉を開けた。目の前にはヘクターの顔。

「うどあー!!」

わたしは思わず後ずさる。ここ最近の話し合いで少し馴れたとはいえ、顔アップはだめだ。

「今大丈夫？」

ヘクターが言うと、その後ろからアルフレートとフロロも顔を出す。

「このおにいちゃんが何か言いたいことがあるらしいぞ」

そう言うときアルフレートは部屋にずかずか入ってくる。部屋をぐるっと見て一言。

「ふむ、部屋の質は一緒なんだな」

「デリカシーのないエルフねえ……」

ローザがむくり、と起き上がった。

「で、話つて？」

みんなが適当にベッドに腰掛けるのを見て、わたしはヘクターに尋ねた。

「いや、その、さっきの『リーダー』の話なんだけど……」

「ぴったりじゃない。他に誰がやんのよ。いよ！リーダー！男前！」
ローザの冷やかしにも、めげずにヘクターは手を振り遮る。

「いやいや、俺はさ、ここに入れてもらった立場なわけだよ。新参者がやることじゃないような気がするんだけど……」

「私がやるよりはよっぽどマシですよ」

イルヴァの大変自覚ある言葉に、皆頬を引きつらせる。その時だった。

とんとん

再びノックの音がする。

『お食事ですにゃー』

扉の向こうからは茶虎猫の声。

「じゃ、そういうことで」

ローザは立ち上がるとヘクターの肩をぽん、と叩いた。

「応援してるぞ」

これはアルフレート。

「ヘクターさんなら大丈夫ですう」

これはイルヴァ。三人は順に部屋を後にする。そしてフロロはおもむろにヘクターの肩に乗ると、肩車の体勢をとった。

「さ、行こうか」

それを聞くとヘクターは溜息一つ、諦めの表情で立ち上がった。ハラハラと状況を見ていただけの自分が情けない。

猫たちがあわただしくカトラリーを並べる間をくぐって、夕食の席につく。テーブルを見渡すと、目の前にはオードブルらしき冷製ものが。他にも大皿のグラタンやらやたら大きなお魚の丸焼き、コールドビーフにキノコが散らばるサラダ。

「さあさあ、みんな席に着いたらいたただこう」

バレットさんが奥の席からニコニコする。

「すいません、何から何まで」

恐縮するヘクターにバレットさんは頭を振った。

「私は普段、この子らだけと暮らしとる。たまの機会、じっくり楽しみたいんじゃないよ」

この子ら、とは猫さんたちのことであろう。バレットさんと猫たちは顔を見合わせるのにこー、と笑った。始めに会った茶虎に白猫、他にも黒にお腹だけ真っ白な子や、三毛タイプにクリーム色の長毛種もいる。

「みなさんお若いから、今日はオレンジジュースにしましたにや」
三毛の子がそう言つて、グラスにそそいでくれた。お礼を言つと、目の前の料理に口を付けた。ベビーリーフに油のつたお刺身がきれいに並べられ、バルサミコの匂いがするソースがお皿に線を描いている。

「おいしい！」

お世辞なしの感想を漏らすと猫たちは嬉しそうに目を細めた。

「これってみんなあなた達が作ったの？」

わたしが聞くと、茶虎が頷く。

「食事にもやんたちで毎日作るにやー」

ぶっ

アルフレートが吹き出す。そこに、
がっ！

隣に座っているローザが、彼の足を踏みつけたであろう音がした。そういやアルフレートって変に潔癖なところあったっけ……。それにしても失礼な奴だ。

「バレットさんはどんな研究をしているんですか？」

誤魔化そうとしたのか、ヘクターがバレットさんに訪ねる。

「ふむ、主にやっているのは生活用品じゃな」

意外な答えにわたしは頭が「？」になる。その顔を見たのかバレットさんは話を続けた。

「私は魔術も多少かじつとるが、あくまでも研究に必要な部分だけ。私は科学者でな。生活が豊かになるような発明品を考え、実際に使える物を日夜研究しとる」

そこでワインを一口。

「ふう、例えばこんな夕食の支度なんかじゃな。この魚を焼く場合……、お嬢ちゃんだったら何を使う？」

わたしは問いに答える。

「これだったら、オーブンね。この大きさじゃフライパンじゃ焼けないし」

「そのオーブンは、どうやって温められる？」

「どうやって、って……。火を焼べたり、最近じゃ魔力装置で簡単に火を着けられるタイプが出てきたわ」

「それを作ったのが私じゃよ」

「……えっ……！」

絶句しているわたしの隣から、イルヴァがのほほんと口を出す。

「へー、すごいじゃないですかあ」

うーん……。あんまりすごそうに聞こえない。本当に仰天するぐらい凄い事なんだけど。

「今はまだ魔術に頼っている段階じゃ。これからは魔法の力無しに……そうじゃな、照明のようなものが出来ればいいと思つとる」

なるほど、それで『科学者』というわけか……。もしかしたら門のベルなんかもこの人の発明品だったりするのかもしれない。

「俺もからくりは好き」

フロロの言葉にバレットさんは目を大きく開ける。

「おお！そうか！じゃあ君とは今度ゆっくり語り合いたいもんじゃの」

その笑顔を見て、わたしはフロロが物の『解体』が好き、という事を、教えるべきか躊躇していた。

まだ日の昇りきる前に、わたし達はもそもとベッドから這い出した。バレットさん特製目覚まし時計を探り当てると叩くようにして止める。

「むー……、眠いー」

横から聞こえたローザの声にわたしは答える。

「わたしだつて眠いわよー……。あ、イルヴァ起こして。絶対また寝てるから」

昨日はバレットさんときつちりデザートまで楽しんだ後、部屋に戻って毎日の習慣にしている呪文の詠唱の練習までしたのだ。わたしも寝起きが良いとはいえないが、初の冒険に赴く日にぐだぐだしてもいられない。

「おし！」

気合いを入れると部屋を出た。

「お目覚めかにゃー」

廊下をちょうど、白猫の「タンタ」がお湯を持って来てくれるところに会う。

「ゆっくり寝れたかにゃ？お湯どうぞにゃー」

タンタがお湯の入った洗面器を渡してくれた。猫たちもわたし達の出発が早いのに合わせて起きてくれているらしい。

「ほんと、何から何までありがとう」

「気にするにゃ。働くのが好きなんだにゃ。人がいっぱいいるとやることいっぱい嬉しいにゃー」

本心から言っているっぽい様子からして、そういう種族なのかもしれない。初めて出会う種族だが世界でも数少ない種族なのだろうか。がちゃ、という音が廊下に響く。隣の部屋の扉が開いた。

「あ、リジア、おはよう」

ヘクターが顔を出す。

「ああああおおおおおはよう」

心臓が爆発しそうになる。朝の挨拶からこの調子だ。……この先、生き残れるのか、わたし……。しかし寝起きの顔を見たり見られたりするの、やましいことなくとも気恥ずかしいものである。

「あのさ、アルフレートがどうしても起きないんだけど、どうしたらいい？」

困り顔のヘクター。うつむ、見るからに低血圧顔だもんなー、あのエルフ。

「大丈夫。意外と頑丈だから死なない程度にやっちゃって」

「ん、わかった」

わたしの言葉に真顔で部屋に戻って行く彼。……大分わたしたちに馴れてきてくれたようで嬉しい限りだ。

イルヴァを叩き起こし、そのあと全員でアルフレートを叩き起こす。朝食もしっかりいただき（ふつかふかの焼きたてパンだった！）、なんとお弁当まで持たせてもらったわたし達。

出発の際にはタンタがわたしの手を握り、

「がんばってくるにゃー」

と言ってくれた。わたしはぶにぶにの手を握り返すと、にっこり頷いた。

「いってきますー！」

全員で大きな声で挨拶をすませると、まだ静かな村を歩きだした。

口開ける、魔物の巢

「半日ぐらいって話だったわよねー。急げば昼ぐらいには着くかしら？」

村を出るあたりでローザが口を開く。

「順調に行けばいいけど、日帰りは無理だと思った方がいいかもね」
あいかわらずフロロを肩車しっぱなしのヘクターが苦笑する。それを聞いていたアルフレートがうんざりしたような声を出した。

「野宿ってことか？私は体力がないんだ。まいったな」

えーっと、エルフって本来『自然生活をする人』じゃなかったっけ？一日の野宿ごときでぶーたれる妖精って一体……。

「それより気になってたんですけど」

イルヴァが話題を変える。

「ポゼウラスの実ってどんなものなんです？聞いたことないですけど」

わたし、ローザ、アルフレートは顔を合わせた。

「あまりメジャーな植物じゃないけど、魔導をかじってる人間なら半分くらいは知ってるかもね」

「半分？」

わたしの言葉にフロロが眉をひそめる。

「そ。魔導の研究に使うことはあるけど、その魔導をやってる人間でも大多数は触れる機会もないようなマイナーなものってこと」

「それだけ特殊ってこと？バレットさんがやってる研究って」

ヘクターの質問に頷いたのはローザ。

「あたしも聞いたことないことばっかだったのよね。『魔導の力じゃない方法での照明』やらなんやらって」

わたしも大きく頷いた。

バレットさんが語ってくれた彼の研究内容とは、わたし達の理解を超えたものだった。魔導の力を使わない照明器具、と彼は言ってい

たが、蠟燭や松明、はたまた光ゴケや精霊の力を借りるわけでもない『別の力』とは何なのか。わたしには分からなかった。

今主流になっている照明器具といえば魔導石を使った「ライト」だろう。魔導石という魔法の力を封じたり、それを簡単なスペルで解放出来たりする恐ろしく便利なものが古代文明の遺跡から見つかったのが数百年前。そのままだと強大すぎるそれを簡略化、大量生産にこぎ着けたのが十数年前。そのプロトタイプに「ライト」なんかの簡単な魔法を封じてやると、あら便利。誰でも使える光源の出来上がりである。今ではデザインも増えて一般家庭にまで広がっているのである。それもこれも魔導の進歩の恩恵であると言えるよう。

バレットさんがそれに大きく貢献しているであろうことは、彼の「オーブン」の話でも想像がつく。何しろ彼はエレメンツの中でも扱いにくい「火」のエレメンツを、スイッチ一つでコントロールすることができる魔導石を発明する、という偉業を成し遂げているのだ。わたしも発明者の名前を知らなかったのだが、まさかこんな形で会うことになるとは思わなかった。その彼が魔導の力がある意味否定する研究をしている。彼はこう言ったのだ。

「不可思議な力を『魔導』『魔法』というのだ。人間は日々、真相の解明に努力するべきなのじゃよ。マナという力に頼るなかれ。人間は魔法に頼りすぎる」

その話しに魔術師を目指す自分を否定されたような気持ちにはならなかったが、わたしにはその内容も、その研究の意味でさえ……分からなかった。

「あたし怖いこと考えちゃったのよね」

辺りを伺いながらのローザの呟きにわたしは聞き返した。

「な、何？」

「あの屋敷にいた猫達……元は失踪したっていう村人だったりしてすつかり頭から消え去っていたバレット邸の噂話にわたしは背中がヒヤリとする。人間が猫になる、なんて聞いた事もないが何かの呪術……とか。

「……ちょ、ちょっとおゝ！怖いこと言わないでよ！」

「だから『怖いこと考えた』って言ったわよ！」

「あながちあり得ない話じゃないかもなあ」

騒ぐわたし達を見て、アルフレートがニヤリと笑う。

「なんせまるきり動物の猫の外見で、あんなに高知能な種族、私でも見た事ないぞ」

わたし達より長い時を生きて来たアルフレートの経験したことは、わたし達より圧倒的に多いのだろう。その彼も知らないとは。それでも、わたしは納得がいくことが出来なかった。

「でも……それならなんでバレットさんを慕ってるのよ。理性もあるように見えたし」

操られていた場合、瞳に光がなかったり、言動に力がなかったりと独特の症状が見られる。あの猫たちにはそんなものは見られず、それどころかあんなに生き生きとしていたではないか。

「主従関係っていうより、家族みたいだったよな」

ヘクターがぼつり、呟く。わたしが思っていたままのことを言ってくれた。タンタたちはバレットさんの身の回りの世話はしているものの、使用人というよりは家族という間柄に見えたのだ。

「ま、あれこれ考えてもしょうがない。俺たちはやることをやるだけだ」

そう言っただけはわたしの頭にポン、と手を乗せた。こ、これは。

「それもそうよね。……変な想像膨らまして腹は膨らまないしね」ローザが肩をすくめる。

「なんか親父臭いですう」

とイルヴァ。その言葉に怒り出すローザ。と、アルフレートがわたしの顔を見て仰天する。

「うわっ、お前どうしたんだその顔！」

わたしは火を噴いている顔の熱を感じながら呟いた。

「何でも無い……」

ゴブリンのひとつにでも遭遇すれば盛り上がったのだろうが、平穩無事に件の洞窟前へとやって来た。何かの気配がする度、フロロが迂回を指示してくれたお陰でもある。彼は恐ろしく耳が良いのだ。登りきった太陽は心地好い暖かさをもたらしてくれている。冒険というよりハイキングを楽しむような気分になる。

最低限の舗装がされた街道を脇に入り歩くことしばし、バレットさんに聞いてきた場所をくまなく探していく。切り立った崖を見上げつつ入り口を探すと、いきなりぽっかりと開いた横穴が見つかった。大きさはトロール一頭分ぐらいだろうか。中は薄暗く、入り口付近の様子しか伺えない。

「ちよつと待った」

フロロがすつと音無くヘクターの肩から飛び降りる。そのまま地面に這いつくばり、猟犬よろしく付近を調べ始める。続いて洞窟の入り口辺りの壁を見ると満足げに声を漏らす。

「ふんふん……」

「何かわかった？」

ヘクターの問いかけにフロロはにっこり笑顔で振り向く。

「ゴブリンの巣だね。何で見張りがいないのか分からないけど、今も住んでると思うよ」

知能レベルは低いとはいえ、一応集団生活を営み道具の使用の知識もあるゴブリンである。通常はこういった住処の前には見張り役なんかを置いてる場合が多い。人間を見れば襲い掛かるような彼等は、彼等からすれば人間が敵だからだ。

「縄張りの跡もあるな」

アルフレートが一本の木を見て言うのを、ローザは後ろから覗きこみ露骨に嫌な顔をし眉をしかめた。わたしも近づき覗き見る。

「サイヴァの紋章ね」

黒十字を丸で囲んだ紋章。イビツだが力強く、木の表面に刻み込まれている。この世の混沌を司ると言われる邪神のシンボルである。サイヴァは邪神の中でも一番メジャーな存在である女神だが、人間社会では信仰を法律で禁止する国が大半である。此処ローラスでもそうだ。神殿や集会場の建設はもちろん、信仰自体も厳しく国の法で禁止している。

しかしゴブリンのようなモンスターの間ではなかなか人気(?)の神様のようだ。このように自分たちの巣穴に、表札のようにシンボルを掲げるのがサイヴァ信者のモンスターの特徴でもある。

「ゴブリンシャーマンがいるかもしれないってこと？」

ローザの問いにわたしは肩をすくめた。

「そうとも限らないけど……いないとも限らないって感じじゃない？」

ゴブリンシャーマンとは彼らの中のエリート。一回り体が大きく、サイヴァの神官で神聖魔法を使う。集団の中のリーダーとして君臨するのだ。

「ゴブリンはサイヴァ信仰が常だ。別にシャーマンがいるとはかぎらん。このレベルの巣穴にそんな力があるとも思えない」

アルフレートの言葉にわたしは頷く。そもそもシャーマンがいるような規模の集団に出会えるのは稀らしいのだ。経験は無くとも本の虫であるわたしはある程度知っていた。頭でっかちともいう。

「とりあえず、乗り込んでみるか」

ヘクターが静かに、しかし力強く言うのをみんなが頷き返事する。一人除いて。

「待ってください！」

イルヴァが声を上げた。真剣な声に全員が振り向き、彼女を見るとイルヴァはきつぱり言い放つ。

「お腹すきました。ご飯にしませんか？」

「いや〜ん、おいしそう!」

タンタたちが持たせてくれたお弁当の蓋を開け、わたしは身をよじらせた。念のため、ゴブリンの巣穴からは再び距離をとっての休みである。気づけば日が昇りきっており、早朝出発したわたし達はイルヴァでなくとも腹ぺこだったのだ。

切り株や手頃な岩に腰掛け、お弁当を広げる。朝食食べたパンで作ったサンドイッチ。中身はツナやたまご、ローストビーフと野菜サンドもある。

「なつかしいなー」

ヘクターがタコさんウィンナーをしげしげ眺め、妙に嬉しそうに口に運ぶ。お宝映像発見!わたしはその様を一瞬も見逃すまいと瞳に今までに無い力をこめた。

(よし!脳内保管完了!)

「何ガッツポーズしてんの?」

ローザが冷たく突っ込んでくるが受け流す。こんな見ようにも見られないシーンも普通に目の前で繰り広げられるのが一緒にパーティーにいる醍醐味である。ファンに殺されても良いから自慢しまくりたいなあ……。やってることがファンの人間と変わらない気もするが。

「肉が多いな……」

アルフレートがぼやく。イルヴァがすかさず、フォークを出した。

「じゃあ食べてあげます。そのかわり口付けしないでくださいね。付けたのは食べられませんから」

「だから私はばい菌か?」

そんな会話に気を取られている間に、フロロが野菜をわたしの弁当箱へと移動させてきた。

「ちよつとお!あんたら二人で好き嫌いが噛み合ってるなら、ここ
の二人で交換しなさいよ!」

わたしはアルフレートとフロロを交互に指差した。

「それじゃあイルヴァが貰えないですう」

イルヴァが頬を膨らます。

「仲良いねー」

ヘクターがしみじみ言う。ローザがそんな彼の言葉に溜息ついた。
「いや、こんな低レベルな会話にほのぼのしないでいいから。……
と、そうだリジア、あんた洞窟の中で魔法使わないでよ？」
隣りでアルフレートも頷いている。

「な、なんですよ」

「なんでって……言わなくてもわかるでしょうが」

呆れた口調のローザの後をアルフレートが引き継いだ。

「みんな、死ぬぞ」

ごくり……。その言葉に全員が唾を飲み込んだ。

「ところでさあ、みんな生でモンスターに会ったことあるの？」

我ながら不適切な言い回しだが、要するに『モンスターに遭遇した経験があるのか、ないのか』という疑問を投げかけてみる。

「あるわよ、お父様に色々連れ回されたから」

ローザが「なにを今更」といった感じに答えた。イルヴァも頷く。

「ファイタークラスは授業でモンスター討伐なんてこともやらされますよ」

ヘクターも大きく頷いた。

「ゴブリンやらコボルトやらの巣穴に突っ込まれるんだよ。それこそローラスの隅から隅まで被害を調べて遠征させられるわけ」

二人は眉間にしわ寄せ苦悶の表情を浮かべる。何やらつらい思い出らしい。

「トロールの集落に崖から蹴落とす教官もいますからね……。あ、実践が不安なら心配しないでください。ゴブリンぐらいだいじょうぶだいじょうぶ」

そう言ってイルヴァは手を振った。そういやファイタークラスってしよっちゅう課外授業なんていつていない時多いつけ。それでも、毎日きっちり昼休憩の時間には戻ってきているようなので、体力お化けだ。

「な、なんか魔術師クラスと随分違うわねー」

ローザが額に汗を浮かべる。アルフレートは「下らん質問だ」とばかりに返事もしない。

「フロロは？」

わたしが聞くと、フロロは最後のミニトマトを口に頬張りこちらを振り向いた。

「モロロ族は引越多い。途中で武器を持つ機会も多い」

なるほど。モロロ族は本来、定住生活をしてない種族だ。旅から旅の生活ではそういうこともあるだろう。彼が学園に留まっているのも不思議な事だし。

わたしといえば自分でいうのも何だが、根っからの温室育ち。都会のど真ん中生まれなのもあって野生のモンスターに遭遇する機会も無い。それだけローラス共和国の中でも治安の良い町に住んでいるのは良いことかも知れないが、自分の頭でつかちさに嫌気がさす。

「ってことは私だけ？ 本当に『初』なのって」

実は隣町なんか遊びに行く時に、馬車の中から遠目にしかモンスターを見たことがなかった。わたしの言葉にローザがにっこり微笑んだ。

「いいのよ、気にしないで。……っていうか余計なことされない方が助かるから」

この言葉に、数年来の付き合いの親友に壁を感じたのは言うまでもない。

日差しが木々を照らし、光がきらきらと輝く何ともきれいな光景が辺りに広がる。目の前に不気味にぽっかり空いた洞窟の入り口が見えなければ、思わずスキップしたくなるような良い日和である。再び問題の洞窟前へと戻って来たわたし達。

「今度こそ、入るぞ？」

アルフレートが一步前に踏み出し、こちらを振り返る。

「オツケーオツケー」

「ささつと行っちゃいましょう」

軽い調子の返事を聞き流しつつ、アルフレートは短く呪文を紡ぐ。

「ライト」

ウィル・オ・ウィスプがアルフレートの言葉に応え、一つの光球が生まれる。それはすーっとアルフレートの周りを漂ったあと、わたし達の前方??洞窟内を照らした。アルフレートはフロロの方へと視線を送り、黙って手をくいくい、と動かす。フロロは『わかってますよ』と言わんばかりに先陣を切り始めた。

わたしはごくり、と息を飲む。今の今までノーテンキを気取っていたが、人生初のダンジョン探掘である。

(……いざ、って時にも呪文なんて全部忘れそう)

怖くない、と言ったら嘘になる。そんなわたしを見透かしたように誰かが背中をぽん、と叩く。振り向くとヘクターだ。

「俺が最後尾になるから、リジアはその前にいてもらえる？」

「え、あああう、うん」

「あと、後ろにも明かりが欲しいな。何かないかな？」

明かり、と言われて一瞬頭が真っ白になるが、すぐに『ライト』の呪文詠唱が思い起こされる。一呼吸してから精霊を呼び起こす呪文を繋いでいった。

「ライト」

一つの光の球がわたしの頭上に煌めいた。

「早く行くわよー」

すでに洞窟内を歩いているローザから声がかかる。

「さ、行こう」

「うん！」

ヘクターに返事をし、わたしはその前に緊張が大分解れていることに気が付いた。きっと不安が顔に出ていたのだろう。それに気付いてほぐすきっかけを与えてくれたのだ。すごい。

わたしは色恋など関係無しに、ヘクターのことを尊敬してしまった。先頭にシーフであるフロロ、次に明かりを持ったアルフレートが続き、イルヴァ、ローザ、わたし、最後にヘクター。そんな順番で洞窟内を突き進む。人間なら余裕で連れ立って歩けるが、トロールなら厳しいか。そのぐらいの道幅である。この程度なら大物のモンスターはいなさうだ。ふと、先頭を歩くフロロが足を止めた。

「な、何？」

ローザが上ずった声を上げる。フロロは口元に人差し指を立て、『静かに』というポーズを取った。彼の猫のような耳が洞窟の先へと向き、長いしっぽが天井へぴん、と伸びる。

「……思ったよりここ、狭い。もう少し先にゴブリン達が集まっている声がする」

一同に緊張がはりつめた。え？え？何、もう出てきちゃうの？わたしは密かにうるたえる。

「数は？」

「少なくとも十数…かな」

アルフレートの質問に淡々と答えるフロロ。

「フロロって耳がいいんだな…」

ヘクターが耳に手を当て、音を拾う仕草をするが、諦めて手をおろす。

「大丈夫！そのくらい軽いですよ！」

声を張り上げたイルヴァの口元を、ローザが慌てて手で覆った。

「ばか！ 気付かれちゃうじゃないのっ」

それでもイルヴァは意に反さず鼻をならす。

「いいんですよっ。喧嘩売りに来てんだから」

「あんたはよくてもあたしはやーよ！」

「うーん、ファイタークラスのノリだなあ」

ヘクターがぼつりと呟いた。ファイタークラスはなかなかアグレッシブなようである。イルヴァも普段よりテンションが高いようだし、ヘクターも落ちつき払っていた。このくらいなら余裕、ってことだろうか。わたしは二人が頼もしく見えるのと同時に、なんだか焦ってきてしまった。

やっぱり知識だけの頭でつかちじゃやばくない？ 敵が目の前に現れた時、わたしは何か出来るの？

「おおー、いますねいますねー」

洞窟の最深部と思われる今までより開かれた場所、待ち構えるゴブリンたちを前にいつもよりテンション高めのイルヴァは嬉しそうに声を上げる。すでに手におのおの武器（汚いダガーやショートソードなどお決まりの）を持ち身構えているゴ布林達。あんなだけ騒げば気づかれているに決まっているか。

こちらイルヴァはとげとげの付いたいかついウォーハンマーを、ヘクターは前に出て腰に差したロングソードを引き抜き身構えた。ああ、なんて様になるお姿だろう……。いつまでも見ていたい。

うつとりするのも束の間、わたしが隣を見ると、アルフレートも何やらマントの下から取り出そうとするのが見える。

「ふふっ私も援護に回るとするか」

手に持つのは小さめのハープ。見た瞬間に察知したわたしは、

「はあ！！」

そのままそれを蹴り飛ばす！

「な、何をするんだ、この下等生物！」

アルフレートがあわてて抗議の声をあげる。

「どっちが下等だ、この馬鹿エルフ！あんたの歌聴いたらみんな気絶しちゃうわよ！」

わたしの怒りの声にローザもかぶさる。

「そうよそうよ！あんたの歌聴いてあたしらが今までどんな目にあっただと思ってるの！いいから魔法使いなさいよ！」

わたしとローザを一瞥すると、アルフレートは不敵に微笑んだ。

「いいのか？私がまともにやったら、実につまらないことになるぞ？」

「いいから行け！」

アルフレートの台詞を聞き終わる前に、ローザは彼を前方へと蹴り

飛ばす。ぶーん、と効果音を付けたくなるような見事な放物線を描き、ゴブリンの集団の中へと消えていくアルフレート。

「ギギヨギヨ！」

ゴ布林達からも驚きの声が上がった。それを合図にヘクター、イルヴァの前線組がぶつかっていく。ゴ布林達もあわてて臨戦態勢に戻るが、相手が悪い。瞬く間に地面へと伏せていく。うーむ、ここまでの腕前とは知らなかったぞ、ファイターズ！

見ればフロロも見事な身軽さで、ゴ布林達を翻弄していた。

「ほ、は、ほ」

逃げていただけなのだが、大勢のゴ布林達の注意を引くのに成功している。

「ライトニング・アロー！」

ローザの呪文で現れた光の矢で、そのうちの一匹が地へ沈んだ。よし！わたしも活躍せねば！

気合い一つ、わたしは呪文を唱える。炎の精霊サラムンダーを召還すべく精霊語を唱え、続いて手を合わせる。その時、

「よけいなことするなああああああああ！！！」

ずげしっ！！！！

脳天に激しい痛みを受けて、わたしはその場にうずくまった。

「うつつうつ、な、何すんのよ！ローザちゃん！」

涙目で訴えるわたしの肩をぽん、と叩き、ローザは冷静に言った。

「みんな、蒸し焼きになる。絶対」

……皆の勇姿にわたしも何かやりたかったんだもん。

開始からたった数分後だったに違いない。すっかり静かになった洞窟内、全員が息をついた。

「結構、逃げられたね」

再起不能になったゴ布林達を見下ろし、ヘクターが呟く。見ればたしかに踏み込んだ時点よりもゴブリンの数は減っている。

「まあまあ、上出来じゃない？初の戦闘としちゃ」

ローザが腰に手を当て答える。

「なんか消化不良……」

わたしが言うつと、いつの間にやら隣にきたアルフレートも大きく頷く。

「同感だな」

確かゴブリンの山に突っ込んでから姿見てなかったけど……。彼の場合は歌えなかったことを言っているに違いない。結局わたしとアルフレートだけが何もせず、ってことか。

「で、どこにあるんです？目的のものは」

イルヴァがウオーハンマーを背中に戻し、周りを見回した。さてと……。

わたしは「ライト」を誘導しつつ、洞窟の壁をぐるりと見て回る。

ゴブリン達の生活道具か、ナイフやら壺やらがあるがどかしつつ、目的の植物を探す。みんなは遠巻きに見守っているようだ。少し役割分担を感じた。

「お、あつたあつた。たぶんこれよ」

わたしの一言にメンバーは駆け寄って来た。わたしは明かりを地面の一角に集める。

「これ……？」

イルヴァが意外だと言わんばかりに眉をひそめた。わたしはそれを指でつまむと引っこ抜く。私の手のひらほどの大きさの木の根のようなもの。わたしも図鑑でしか見た事はないが間違いない。「ポゼウラス」である。茶色でひよろひよろと曲がりくねった姿は、一見植物の根にしか見えない。が、よくみるとところどころにくびれがあり、その凸の部分に実が入っているのだ。

「な、なんかイメージと違うな」

ヘクターがしげしげと眺め、溜息をついた。

「まだいっぱい生えてる」

フロロが地面にしゃがみつつ、呟く。

「あ、本当です。これならいっぱい採ってけますよあ」

イルヴァも感嘆の声をあげた。ゴブリン達には不要の物だったらしく、土の壁ぎわには根がはびこっていた。

「で、どんぐらい持っていく？」

ローザが言った。しばらくの沈黙ののち、全員がわたしを見ているのに気付く。

「え、ええ！？わたし？」

「だってそういうの詳しそうだし……」

ローザがみんなを見回しつつ言う。みんなも頷いている。しようがないなあ……。でもわたしもはつきりいつて専門外なんですけど。

「とりあえず手持ちの袋に入るまでにしましょう。あんまり欲張っても『根を残して』って言われたんだし」

そう、再び生えるように根を残してきてと言われて来ていたが、正直この植物のどこが根の部分に当たるのかわからない。革袋いっぱいにも持っていけば魔術の材料なんぞ余る程十分なはず。わたしはベルトにかけていた折りたたみの袋を解くと、地面に広げた。

洞窟を出ると、もうすっかり日は沈んでいた。

「あらー、意外と時間経ってるのねー」

全員が思っていたであろうことをローザが代弁した。

「どうしようか。このまま街道に出ても徹夜で歩くことになっちゃうね」

わたしが言つとローザも頷く。

「夜が明けるまでキャンプでも張った方が良いな」

ヘクターが言つと、フロロが「キャンプファイヤーだ」と言つて飛び跳ねた。うーん、女の子としては野宿はつらいところだけでしょうがあるまい。徹夜で歩き続けるよりは良い。

「ここじゃゴブリン達がいっ戻るかわからないな。昼飯取ったとこ

ろまで戻ろう」

ヘクターの言葉に全員が頷いた。

さて行こうか、というところでローザがわたしの肩を叩く。

「リジア、ちょっと手伝ってよ」

「何を？」

「これよ、これ消してかないと」

ローザの指差す先を見ると先ほど見た木に刻まれたサイヴァの紋章。

「えー……めんどくさいなあ。ほっとこうよ」

「だめよ！こんな邪教を見逃すなんてフローの巫女として出来ないわ！」

……正義振りがざすのは結構だが、一人でやってほしい。これをどうこうしたところでどんな意味があるというのか。と思うのはわたしが無信仰な人間だからなのか？

「おーい、何やってんだー？」

先に行くアルフレートから声がかかる。

「後から行くわ！ほら！リジア、消すわよ！」

手にしたナイフで木の表面を削りだすローザ。わたしはブツブツ文句を言いつつ、背中 of ナイフを引き抜いた。

「あ、そうだ！丁度わたし、欲求不満だったし、ファイアーボールあたりぶちかますっていうのは？」

わたしは閃いた素晴らしい案を披露するが、

「却下」

ローザの一言で撃沈。黙々と木をほじくることにした。

ばちぱちと爆ぜる火の粉を見つめながら、わたしは赤くなった頬をさすった。隣ではヘクターがあくびを一つ。たき火の向こうでは残りのメンバーがいびきをかいている。再び熱を持った頬を手でさする。

「どうしたの？火が近いんじゃない？」

ヘクターに顔を覗き込まれ、わたしは心臓が飛び跳ねる。

「いや！だいじょうぶ！」

そう答えて手を振るわたしを見て、ヘクターは微笑んだ。

「やっぱり赤いよ。もう少し下がりな？」

これは熱いわけじゃなくて……、と説明したいところだ。

見張りを決める段階でじゃんけんに負けたわたし達二人。前半後半に分けたため、数時間後にはアルフレート、イルヴァに交代するわけだけど……。この展開、もうね、神様ってよく見てるね。嬉しいやら緊張やらで文字通り泣き笑いになってしまったわたし。ローザとフロロは見張りを免れて能天気になんて笑ってたけど。ちなみにアルフレートとイルヴァは後半の見張りが決まった時点でさっさと毛布に入ってた。

わたしが腰を浮かせ、少し火から離れた時だった。

「リジアってすごいんだね」

ヘクターが言った言葉でひっくり返りそうになった。

「え？え？なんで？」

「いや、同い年のはずなのに色んなこと知ってるんだなあ、と思って」

「えっと……もしかして、これのこと？」

そう言っただけはポゼウラスが詰まった袋を指差す。

「いや、それもあるけど明かり付けたり火を起こしたりする魔法も全部呪文を覚えてるんでしょ？」

そう改めていわれると照れるが、ファイタークラスの人から見ればそんな簡単な魔法でもすごいのかも。

「うーん、ある程度理論を勉強すれば暗記しなくても呪文が組み立てられるっていうか……。そう『おしゃべり』する感じになるのね。あと全部覚えてるわけじゃなくって……。実は魔術書持ち歩いてるし」

「ああ、いつも荷物多いもんね」

その言葉でバスでのことを思い出すわたし。

「あああ！そうだ！」

突然叫んだわたしの声にヘクターがびくん、となる。

「そう！聞きたい！あの時！」

「お、落ち着いて……。リジア」

「わ、わたしのこといついついつから知ってたの？」

始めきよんとしていたが、ヘクターはゆっくり答え出す。

「ああ、リジアのこと？いつからだったか……。たまにバスで一緒になるから知ってたよ。毎日荷物多くて大変そうだったから」

『知ってたよ』の言葉にジーンとするわたし。

「あんまり関心なさそうな顔だったから俺のこと知ってた方がびっくりしたけど」

うわああああ、ち、違うのよ……。ストーカー認定されるのが怖くて目が合いそうになるたび、そっぽ向いてただけなのよお……。

「魔術師クラスの人って……。とくにソーサラークラスの人っていつも分厚い本を持ち歩いてるから大変だなー、って。……。俺らのクラスなんかだと魔力そのものが無い奴がほとんどだし、魔法覚えるだけでもすごいなーって思うよ」

そうなんだ……。毎日ファイタークラスの人を羨望の眼差しで見ていたわたしとしては嬉しいことだ。しばらくの沈黙ののち、ヘクターが笑い始めた。

「実はさ、前から話したかったんだ」

「は……。？えええええ！なん、なんで？」

「君らの仲間になりたかったから、かな。今年になって演習が始ま

「つたら絶対組みたいって思ってた」

ヘクターの言葉が嬉しさと共に緊張として胸にささった。なんでだろう。わたしはおずおずと尋ねることにした。

「聞いて良いかな？」

「何？」

「どうしてわたし達の……わたしはみんないい奴だと思ってるけど……パーティーに入りたいと思ったの？」

これが正直な気持ちだ。しばらく言葉を探している様子のヘクターが、主室に口を開いた。

「普通のパーティーじゃ嫌だったんだ。……普通の旅で終わってしまう気がして」

そこまで言ってわたしの顔を見る。

「学園じゃ変わり者の集団みたいに言われてるけど、俺にはそれが羨ましかった。正直、あの日君らが来てくれるまでは俺から行こうと思ってたから、面接に行くみたいで緊張してたんだ」

そう言って笑うヘクターの銀色の髪がたき火でオレンジ色に輝いて、わたしは見とれてしまっていた。

すっかり爽快な朝！朝日の暖かさに体を温められ、わたしは毛布から抜け出すと伸びをした。野宿に加え、昨日のヘクターとの会話に興奮したわたしは眠れないかと思っただ、やはり疲れていたらしい。信じられないほど眠り込んでしまった。

ふと周りを見ると、もう火の気が消えたたき火の前でイルヴァとアルフレートが座ったまま眠り込んでいる。

眠り………おい。

「ちよつとお……」

わたしは起き上がり、二人の肩を叩いた。ビクン、となったのち、目を明ける二人。

「……んあ、リジア。……おはようございますう」

イルヴァが間抜けな声を出した。

「おはよー、じゃないわよ。なんで寝てんのよ！これじゃ見張りの意味ないじゃない」

「この二人に頼んだあたし達が間違ってたのよ」

いつの間にやら起き出したローザが後ろから言った。そういえば寝起きの悪さワースト2の揃い組じゃないの、この二人……。アルフレートといえばまた寝息を立ててるし。せめて前半の見張りにするべきだったんだな。

「おーい、フロロ！起きなさ？い。ほら、リジアもそこのお兄さん起こしてよ」

ローザに言われ、きれいに毛布に包まれたヘクターを見る。木の幹に背を預けてるところを見ると、当番の後も見張りを続けていたのかもしれない。今はすっかり寝息を立てているが、起こすのがかわいそうになってしまふ。しばし寝顔を眺めさせていただき、ヘクターの肩を叩く。

「おはようございまーす……」
はつと目を開けるヘクター。

「あ……おはよう」
少し照れ臭そうな顔の後、のそりと起き上がると伸びをした。

「あーあ……。もう朝かあー」

「うん。早く村に戻って、ご飯にしよう」

わたしの言葉ににっこり笑って頷いた。その時、

「起きろって言っでんじやないの、このカスエルフがあああああ
！……」

「ごがっ……」

ローザの絶叫と痛そうな音が響き渡った。

馴染めない研究者

村に戻って来たわたし達は、真っ直ぐバレットさんの屋敷に向かった。

もう村は日昼の活動が始まっており、人々が出店に立ち寄りたり歩いたりしている姿が見える。その間を通って行くと何人かに「おや？」という顔で見られた。食堂で一緒だった人なのかもしれない。意気揚々にバレット邸の門の前にやってくると、チャイムを鳴らすと手を伸ばす。とその時、アルフレートが手で制して来た。

「……なんか変じゃないか？」

「何がよ」

わたしが返すと、バレットさんの屋敷を見回す。

「精霊の数が……変わっている。どうも変だ」

嘘を言っているわけではない様子にわたしも固まる。人間であるわたしには具現化しているわけではない精霊の姿は見れない。が、エルフである彼には精霊の姿が常時見えるのだ。様々な物質には必ず精霊の力が働いており、彼にはその様が見える。精霊たちの様子がおかしい、というのは屋敷の中が何らかの変化をとげている可能性があるのだ。

「な、なんか事件……とか、事故とか……」

ローザの顔も青ざめている。

「そこまでのやかましさは感じんが……。昨日とは明らかに違うな」
アルフレートはそう言う腕を組みあごを撫でる。

「とにかく入ってみない？」

ヘクターの言葉にわたしはチャイムを鳴らす。しばらく待ってみたが、何も反応がない。昨日は門が開いて、中から執事(?)のネコさんが出て来たのだが。もう一度押してみる。が、またも反応は無し。わたしが呆然としていると、後ろにいたイルヴァが間の抜けた声を出した。

「とりあえずう、何か食べにいきませんか？イルヴァお腹すいちゃってすいちゃって……」

一瞬呆れそうになるが、考えてみれば昨日の夜は簡易食で済ませたし、朝から何も食べてない。わたしもお腹が鳴った。フロロが気づいて、くすくす笑いながらわたしにしがみつき、お腹に耳を当ててくる。

「こらあ！フロロ！」

わたしは赤くなった。ローザがその様子をみて溜息をつく。

「しょうがない、何か食べに戻りましょ。もしかしたらバレットさんも買い物かなにかかもしれないし」

それもそうだ、とつぶやきつつ、そうであってほしい、とも思ってたし。昨日、村に訪れた際にも寄った食堂に行く事にする。でも、あれだけいた猫たちも全員いないなんてことがあるんだろうか……。

「バレットさん？屋敷にいなかったの？」

一昨日も話した食堂のウェイトレスがわたし達の質問に驚きの声をあげた。

「そうなの。どこか出かけてたりしない？」

注文も交えつつ、わたしが聞くとウェイトレスは眉をひそめる。

「あの人買い物なんか全部、一緒に住んでる猫みたいなの子達に任せてみたいだし……。村の人間も姿を見た事無い人がほとんどなのよ。私も村に初めて来た時見かけただけで、それから見てないぐらいだし。だからいない、って方がびつくり」

「すごいな。絵に描いたような研究者そのものじゃないか」

アルフレートが呆れた声を出す。でも……そんなに不気味な印象は受けなかったけどな、わたしは。

「どうする？何があつたにせよ、頼まれたもの渡さなきゃ帰れないし」

ローザが目玉焼きにナイフを入れつつぼやいた。

「それなんだよなあ。いざこざに巻き込まれる前にとんずらしたいとこだが、依頼完了させなきゃ身動きとれん」

アルフレートも唸る。よっぽど良くない空気を屋敷から感じたのか。「で、どうするんです？リーダーさん」

クリームリゾットをパクついたスプーンでヘクターを指すイルヴァ。

「ええ？俺？」

ヘクターは明らかに『だからリーダーなんて』といった顔をした。

天井を眺めたのち、わたしに視線を移す。

「えええ？わたし？」

思わずウインナーを喉に詰まらせそうになる。

「……とりあえずまた行ってみて、反応なければ中覗いてみるしかないでしょ」

「リジア、大胆」

フロロが呟く。

「しょうがないじゃない」

「えー、もう扉の前に置いていきましようよ、これ」

ローザはそう言ってポゼウラスの入った袋を指でつまみ上げた。

「わたしはそれ、したくないわね……。ちよつと気になることあるのよ」

わたしの言葉にヘクターが反応する。

「何？」

「うーん、バレットさんだけならまだ寝てるのかも、とか考えるけど、あの家の猫たち全員が出てこないのが、ね」

何しろ昨日の朝早くにもわたし達より早く起きていた働き者だ。買いい物もあれだけの人数全員が出かけるとも思えない。そう考えながらわたしは白猫のタンタを思い出していた。

「やっぱり何かあったのよ」

ローザが青い顔で言った。大分ネガティブなのがよく分かる。

「そんな……不謹慎ですよ」

イルヴァが大分似合わない言葉で答えた。

「あーあ、知らないぞ、私は。面倒になっても」

「いいわよ」

アルフレートの言葉をわたしはきっぱり突っ撥ねる。タンタたちに何か起きたのかも知れない。その可能性があるのにそのままにはしたくなかった。すると彼はひよい、と肩をすくめ、野菜サラダを食べる作業に戻った。しかしその顔は「やっぱりな」と言っているように見えた。

「すいませーん」

応答のないことを半ば判りつつ、屋敷に向かって声を投げるわたし達。静まりかえる扉が見えていてむなし。

再び戻って来たバレット邸。もちろんチャイムは何度か押させていたが動きはない。意を決したようにヘクターが門に手をかけた。

「あ……、開くみたいだ」

重そうな見かけとは裏腹に、さして力を入れている様子はないが開いていく門を、黙って見つめる。顔を見合わせると、全員で門の中へ足を踏み入れる。玄関までの道も一昨日よりも長く感じる。扉の前までくるとヘクターがノックした。

「すいません！バレットさん！」

やはり静まり返る屋敷に、彼は戸惑いの色をみせつつもドアノブに手をかける。ゆっくりと扉を開けると、顔だけを中に入れ様子を見た。

「……なんだよ、これ」

呟くヘクターの言葉に、アルフレートが前に出た。
ばっ！

扉を大きく開ける。次の瞬間、中の様子にわたし達は息を飲んだ。わたし達が見たもの、それは昨日までとは似ても似つかない屋敷の中だった。

扉をあけると広い玄関ホールがあったはず。左右に廊下が伸び、仕立ての良いカーテンが揺れていたはず。重厚な棚には花が飾ってあったはず。

全てがなくなり、不気味な一本道の廊下が縦に伸びるのみに変わっていたのだ。無機質な灰色の壁はどこまでも続くかと思われるほど続いており、奥の方は真っ暗だ。

「ライト」

アルフレートが呼び寄せた光によって、ある程度奥まで照らせられる。その瞬間、わたしは全身が冷えるのを感じ、心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥った。悲鳴を上げそうになる前に、横にいたローザが息を飲む音が聞こえる。

「だ、だいじょうぶ!？」

わたしにもたれかかって来たローザに声をかけ、逆に自分自身は落ち着きを取り戻す。再び視線を前に戻すと、奥の様子を再度確認した。

「……血、よね？」

「ライト」の呪文によって照らされた範囲の壁に赤黒いシミが見えるのだ。まるで痛手を追った人間が壁に倒れかかりながらも奥へ進んで行ったように見える。

ローザに肩を貸しながらも、わたしの頭にある事が思い出された。

……そういえばエルフって夜目が効くのよね。このエルフ……わざと見せつけやがったな。

「……奥に進もう」

ヘクターが口を開く。その言葉にフロロは黙って先頭に行く。敵がいるかもしれない、という合図だ。

「ごめん、もう大丈夫」

ローザが青い顔はしているものの、立ち上がった。

自然とゴブリンの洞窟に入った時と同じポジションで屋敷内に入るわたし達。すなわち先頭にフロロ、続いてアルフレートとイルヴァが続き、ローザにわたし、最後にヘクター。こんな状況でも後ろにヘクターがいると思うと心なしか安心する。

しばらく進むと壁も綺麗になる。が、倒れた人影が見えないところを見ると、どこかに運ばれた後なのだろうか……。

「誰の血なのかしらね……」

ローザの小声の質問にわたしは首をひねる。

「普通に考えたらバレットさんか……。あんまり想像したくないわ

ね」

わたしは猫たちの愛くるしい姿を思い出し、身震いする。

「そうじゃなくて……、違う人間だったら……？」

……？わたしはローザの言う意味がわからなくて首を傾げた。

「やっぱり村の人の言うような人間だったら？バレットさんが」

ぞくつ！ローザの言葉にわたしは背筋が寒くなる。

「……変な事言わないでよ」

わたしがそう呟いた時だった。

ゴン！！

もの凄い音を立てて壁に衝突したイルヴァが、額を押さえてしゃがみこむ。

「ちよ、ちよつと、大丈夫？前見なさいよ、ちゃんとー」

ローザが言うといルヴァは涙目のまま前を見据える。

「え！？」

そう言うのと、今額をぶつけた壁を両手で確認する。

「どうした？」

ヘクターが聞くが、イルヴァは混乱したように頭を振った。

「い、今何がどうなったんです？確かにあの二人こっちに行きましたよね？」

イルヴァの言葉に顔を合わせると、はっとするわたし達。

「フロロは？アルフレートは？」

わたしが言うのと、ヘクターも呆然と答える。

「いない……」

「こっちに行ったんじゃないくて？」

そう言うてローザは右の方向を指差す。そう、ここは右に曲がる角になっていた。

「そんな！だって今まで前にいて、真っ直ぐ進んでいったんですよ

！？あの二人！」

「だってここ曲がり角じゃない……」

ローザの言葉にイルヴァは首を振る。

「ちがいますよう！二人は真っ直ぐ進んで行っただんです！」

ヘクターが二人に割って入った。

「落ち着いて、イルヴァ。ようするに二人の後を続いていた君が同じように真っ直ぐ行こうとしたら壁が現れたってこと？ここはトの字の廊下になってた？」

ヘクターがゆっくり言うといルヴァはしばし考え、頷いた。

「そうですね、いくら暗くても目の前の人が右に曲がったらわかります。第一あの二人消えてるじゃないですかあ」

「……二人が進んだ時点で壁で遮断されたわけね」

わたしが言うといルヴァはまた頷く。

「そうなんですけど……、でもそういう音しましたあ？壁が急に現れたら結構な音がすると思うんですけど……」

それを聞くと、わたしは前に出て問題の壁に手を当てる。

「……わずかだけど魔力は感じるわ。たぶんそういうトラップなんでしょうけど。……フロロが気づかなかったのが痛いわね」

「それだけの技術を持った相手が奥にいるってことか」

ヘクターが言うと、ローザは体を震わせた。

こんな時になんだが、一番乙女な反応をするローザに腹が立つてくるわたし。これは嫉妬か？

ここで無闇に進む前に、と4人で話し合う。わたしは深呼吸すると、みんなに問う。

「聞いてもらっていい？いくつか可能性を言うからおかしい点を指摘して。」

1、入り口の血痕はバレットさんの物。彼には何らかの敵がいて、襲撃を受けた。それで敵を翻弄するために、予め施してあった屋敷の仕掛けを作動させて、……この屋敷の変貌のことね？……奥に逃げた。

2、この屋敷の変貌も敵のやったこと。バレットさんは奥に捕らえられていて、敵はわたしたちの目を翻弄するために屋敷を改造した。
3、入り口の血痕はバレットさん以外のもの。バレットさんは噂通

りのマッドサイエンティストで、血痕を残した人物をこの奥に連れて行った。屋敷の改造は侵入を拒む為。

……こんぐらいかしら」

「2は無いわね。あたしたちがいなくなつてすぐに起きたとしても、こんな大掛かりに建て替えられるとは思えないわ」

ローザの言葉にわたしは頷く。

「理由も無いしね。この家から連れ去ればいいだけの話だし」

わたしは自らの考えを否定することになった。

「……3も無いんじゃないかな。俺たちに依頼してる時にわざわざ騒ぎを起こす理由がわからない」

ヘクターの意見にローザが反論する。

「わたしたち自身が目的だったら？若い人間の身体が材料として欲しくて、この奥でおいでしてるんだったら……？」

こ、怖い事ばかり言うなあ。

「それこそ来た日の夕食がなんか薬でも仕込んだきや良いだけの話しじゃない」

しばらく考えたのち、結局のところフロロとアルフレートとはぐれた以上、二人と遭遇できるまでは帰れないという結論になった。先に進めばそのうち二人とも再会できるかもしれないし、とにかくこのままにするわけにもいかない。

右に曲がってから歩いた歩数を一応数えてはいるものの、距離感把握めそうにない。マッパの勉強もするべきだろうか……。

「あ、今度は二股に別れちゃってますよ」

イルヴァの言葉に前を見ると、T字路が現れた。

「……また右に行ってみよっか」

わたしの言葉に三人とも頷く。答えも無ければヒントもないのだ。迷う前に誰かが提案した方が良さ。しかしこの無機質な灰色の壁に覆われた中をひたすら歩くのは、中々精神的に辛いもんがある。

しばらくいくと、小部屋のようなところへ出た。扉もなく、今までの道より少しばかり開けた程度である。

「行き止まりみたいね」

ローザが周りを見回し言った。無論窓も無く、明かりはわたしの「ライト」のみ。不気味な部屋の奥に、何やらわたしの身長ほどの石像が見える。ありがちなガーゴイルの石像は、特に魔力も感じない。しかし口に加えた水晶玉が『いかにも』である。フロロがいれば探索したいところではあるが、いない今、余計なことはいしなにかぎる。

「さっきのところまで戻りましょ」

わたしがそう言って踵を返した時だった。

「これって何でしょうねー」

後ろから聞こえるイルヴァの台詞に、嫌な予感がして振り返る。

「ちょっとまっ……！」

が、時既に遅し。ガコン！という音と共に足元が消える。イルヴァ
がガーゴイルの口元に手を伸ばすのを見たのが最後、わたしの体は
浮遊感に襲われた。

「イイイイイルヴァのばか――！！！！」

!

声に出ていたかはわからないが、わたしは絶叫しつつ、奈落の底へと沈んで行った。

どっつぱぁーん!!

激しい水しぶきが上がり、身体に痛みが走る。水の中!?!と慌てて懸命にもがく。気づくと誰かに腕を掴まれ、水面へと顔を出した。
「けほっけほっ!」

引き上げてくれた人物に抱えられながら何とか呼吸する。

「大丈夫?」

顔を上げるとヘクターが心配そうに見ていた。

「きゃー!」

思わぬ密着度に悲鳴を上げるわたし。

「ごめん、ちよつと待って」

そう言っていると彼は泳ぎ出した。

「首のあたり、つかまって」

照れてる場合じゃない!わたしはヘクターに必死でつかまった。幸い陸地が近かったようで、すぐに転がり出るわたしたち。ヘクターもしんどかったらしく、肩で息をしている。装備プラス私の重り付きだったのだ。泳げるだけすごいよ……。つーか助けられて悲鳴って何やってんだわたし。

「……まいったね」

息が整うと、ヘクターは口を開いた。

「わたし達だけ?」

「みたいだね。位置的に部屋を中心に落とし穴だったんだと思う。

あの二人は像の脇に立ってたから」

あんの女……。イルヴァにあらためて怒りを覚えつつ、この状況にもちよつぱり感謝するわたし。

「どのくらい落ちたんだろう……?」

上を見上げながらわたしは尋ねる。

「大した事はないと思う。せいぜい地下3、4階程度かな?」

それでもよく気絶しなかったものだ。もし落ちたのが自分一人だった場合を考え、身震いした。それを見て、ヘクターが心配そうに言う。

「寒い？とりあえず服乾かした方がいいな……」

その言葉にわたしも、言ったヘクターも顔が赤くなる。

「いや、変な意味はないんだ……」

「うん！わかってるよ！大丈夫！」

慌てるあまり、声が大きくなるわたし。しかし乾かすといっても、火はわたしが何とか出来るとしても、薪のようなものがない。

「ライト！」

明かりを呼びだしあらためて辺りを見回すが、ここも無機質な壁に囲まれた部屋のようだ。かなり広いようで、部屋の一辺にしか明かりは届いていない。プールのようなものが広がっているのだが、位置関係もはつきりしない。

とりあえずマントとローブ、ブーツを脱いで絞っていく。

「うわー、きもちわりー」

ヘクターもジャケットと中に着た薄い皮鎧のようなものを脱いでいた。

「ちょっとごめんね」

と一言言うと、アンダーシャツを脱ぎ、水を絞る。鍛え上げられた上半身に思わず目を奪われると、「ごめん」と謝られてしまった。思わず「ごちそーさんです」と答えそうになるが、その言葉を飲み込む。

「あの、わたしも服絞りたいんだけど、いいかな……」

おずおずというと、ヘクターはくるりと背をむけた。

「どうぞー。終わったら声かけてね」

いやらしさの無い、本当に紳士的な人だ。

とりあえず水気は切ったものの、しなしなになった服を着たお互いを見て笑い合ってしまった。

「魔法で何とかならない？」

と聞かれたが、ただでさえコントロールの難しい火のエレメンツ。服を灰にするだけなので断った。

「さて、じつとしても風邪ひくだけだし、行動した方がいいね」ヘクターの言葉に頷く。とりあえず、壁際に添って歩いてみることにする。

「しかしこいつて何なんだろうね？」

前に行くヘクターの言葉に、わたしは頭をひねる。

「トラップ……にしてもよくわからないわ。普通、落とし穴って下が槍だったり、ダメージを与えるものでしょ？ わざわざ水を張っているってことは落ちてくるものに対して保護してるようなものなの」

「っていうと？」

「今の段階じゃ何とも言えないけど、装置だったのかも」

「装置？」

「うん、上から何かを水に沈めておくための……」

そこまで言った時、プールから水しぶきが上がる。わたしが反応した時にはすでに、ヘクターはロングソードを抜き身構えていた。

「下がって」

慌てて後ろに下がるわたし。「ライト」を前方へ向ける。明かりに照らされたのは、プールから上がってくる不気味な姿だった。人間と変わらない大きさの半魚人のような体は鱗に覆われぎらついており、目はくすんだブルーのガラス玉のようだ。手にはダガーほどの長い爪が生えている。

ひゅっ！

一陣の風が吹いたように感じた。ヘクターが敵に突っ込むのと同時に相手も地を蹴る。

きーんっ！！

金属のぶつかり合う乾いた音が響き渡った。魚人は両手の爪を振り回し、襲いかかってくる。が、ヘクターもそれを剣で受け流して行く。は、早くて見えない！

モンスターらしき物を見た恐怖よりも、目の前に繰り広げられる光景に呆気にとられてしまった。何度か魚人の爪を受け流したあと、ヘクターは相手に向かって突っ込む。それにバランスを崩された魚人が、体をそらせた。

その瞬間、ヘクターの剣が魚人の脇を薙いでいた。

「ぐががつー!!」

不気味な悲鳴をあげ、魚人はプールの水面へ倒れ込む。

ざばーんっ!

しぶきが上がり、水の中に消えて行く。呆然としてしまったが、我に返るとヘクターに近づいた。

「す、すごい!」

わたしの声に、ヘクターははっとして振り返る。

「大した事無い相手で良かった。平気?」

「いや、私は何にもしてないから」

「それならいいんだ」

……いいのか?

ぱちん、と剣を鞘に納めると、ヘクターは微笑んだ。

か、かつこいいー!ー!ーっ!

再度、壁伝いに歩いていくことにする。暗くて距離が掴めないせいかやたら広く感じるが、やがて部屋の角に行き着き安堵した。方向を変え、また歩いていく。

「大丈夫? 寒くない?」

ヘクターの言葉にわたしは思わず吹き出した。

「え? なに?」

「いや、だって。すごい心配されてるからおかしくって…」

わたしが笑うとヘクターは頬を掻いた。

「うーん、なんていうか、今まで体育会系に囲まれてたから心配になっちゃうっていうか。リジアみたいな女の子は周りにいなかった

し……」

そこまで言っと、あわてて振り向く。

「いや、偉そうだったよね？」

わたしは首を振った。

「ううん、わたしも武器持つ力が無いのは……弱いなあ、って感じた」

戦う力がないのはもちろん、わたしの場合さっきの状況でも泳げない、体力ないってというのが浮き彫りになっちゃったし。そこまで考えてうなだれてしまった。

「俺も何にも知識ねーな、って思った。自分のこと」

ヘクターはそう言ってくすくす笑った。そうかな。

「なんていうか、役割分担なのかもしれないね、こういうの」

ふと感じたことをそのまま口にしてみる。ヘクターは大きく頷いた。

「ファイタークラスのやつってさ、教官から毎日のように言われるんだよね。……『魔術師に魔法を使わせるのは最終手段である』って。ナイト気取りかよ、馬鹿にすんな、って思われちゃうかもしれないけど……」

初めて聞く話だった。わたしは少し芽生えていた『あせり』が、少し減るのを感じた。

今、自分が出来る事をやっていけば良いんだよね。せめて足手まといにならないように。……例えばさっきみたいに、泳げないのを助けてもらってるのに悲鳴あげるとかね。そのためにはちよつとは馴れなきゃなあ、ヘクター自身に。

そう思ったわたしは、

「手繋いでいい？」

ポロツと思いついたまま口に出して後悔する。ぶは！とヘクターが吹き出した。ななな何言っただ、わたしは。

「ごごごめん！違うから！そうじゃないから！」

自分でも何を言っているのかわからない。しかしヘクターは、

「はい」

と言って手を伸ばしてきてくれた。彼の手を掴みながら、トボトボ
歩くわたし。

ウワン！絶対心細いって感じてると思われてるよ！

「あ、あった……」

目の前にはぽっかりと、部屋から廊下に抜ける入り口が口を開けている。

あの後三度ほど魚人と対面してしまったが、魚人がたいしたことなのかヘクターの腕がいいのか、あっさり撃退。わたしはナイトに護衛される姫君ごとく、役に立ってなかったわけだが……。

一度後ろから「ファイアーボール」を試し撃ちさせてもらったが、魚人にはかすりもせずにはるか彼方に消え、どこかの壁にでも着弾したか爆音のみが響いていた。ヘクターは「今ので大体の部屋の広さがわかった」とフオローしてくれたが。優しすぎる彼の言葉に、少し悲しくなった。

それにしてもヘクターの剣さばきは見事というよりない。素人のわたしが言っても説得力のない話だが、動きに無駄がなく素早い。フアイタークラスの授業は何度かのぞき見させてもらったことがあるのだが（目の保養ね）、かなりやり手なんじゃないだろうか……。

「行ってみよう」

ヘクターの言葉に頷くわたし。ちなみに魚人を倒す度、ヘクターが律儀に「はい」と手を差し延べてくれるので、お手々繋いだまんまだったりする。アルフレートあたりに見つかったら絶対馬鹿にされる……。

しばらく道なりに進むと何やら雰囲気が変わり始めた。片側がガラス張りになっているのである。ガラスの向こう側を覗くとこちらと同じような灰色の壁に囲まれた廊下が伸びるのみ。何の為の作りなのか……。そんなことを考えた時だった。

「アルフレート！フロロ！」

あちら側の廊下、わたし達とは逆方向から歩いてくる彼らの姿に思わず、わたしはガラスにへばりついた。必死で呼び掛けるわたしを

余所に、歩き続ける二人。

「ちよつと！無視しないでよ！」

「見えてない？」

そうなのだ。ヘクターの言葉通り、アルフレートもフロロもこちらなど見えていないかのように通り過ぎようとしている。

「おい！妖精ども！聞こえないのーっ！」

振動は伝わるはず、とわたしはガラスを両手でバンバン叩いた。何度か繰り返すと、二人はこちらに目を向け指など指している。が、やはりこちらの姿は見えていないらしく、「なんだ？」といった顔だ。どういうこと？！

「切ってみるか」

ヘクターが腰の剣に手を延ばした。その時、わたしはアルフレートのある動きに気が付く。何やら口を動かし、手も術の印を結んでいるように見える。……こ、これつてもしかして！何かやばい魔法っぽくない！？

「下がってー！」

わたしはヘクターを突き飛ばすと、そのまま倒れこみ耳を塞ぐ。

ドオツツツ！！

爆音とともに熱気が肌の表面をチリチリと焼く。

「うつ……くつ」

堪らず声を洩らすと、後ろから呑気な声が聞こえてきた。

「おや、リジアってば大ー胆ー」

アルフレートの言葉に目を開けると、ヘクターを押し倒す形になっているのに気付く。思わず赤面するが、怒りも沸き上がってきた。

「なーに呑気なこと言ってるのよ！殺す気かつ！」

振り向くと、アルフレートとフロロが今の衝撃で開いたであろう穴から顔を覗かせこつちを見ている。大男でも悠に通れそうなそれは天井まで続き、周りを黒く焦がしている。

「何を怒っている？邪魔されて気が立つてるのはわかるが、ああも騒げば……」

「ちがーうつ！」

慌てて立ち上がるわたし。

「あんだけ叩いたんだから普通誰かがいるもんだと気付くでしょうが！……ってアンタたち、こっちが見えなかったの？」

わたしの言葉に顔を見合わせるアルフレートとフロロ。二人はこちら側に入ってくるとガラスに向かい、感嘆の声を上げた。

「おお！これはすごい」

「鏡じゃないねー」

それを聞くと、ヘクターは向こう側へ行き、こちらを見る。

「おーっ、なんだこれ？」

そう言つてわたしを手まねきした。なんなの、一体。ヘクターの隣に並んだわたしは目を丸くした。

「鏡……？」

「だ、ね。あつちからは透明なガラスだけど、こっち側からは鏡になつてるんだ」

ヘクターの言うことに首をかしげるわたし。

「なんの為に？」

「さあ……」

「アルフレート、なんだと思う？」

再び鏡側へと来た彼に話を振る。アルフレートはしばらく首を捻っていたが、ぼつりと呟く。

「正直、いやらしい事しか思い浮かばないんだが……」

「ぼ、煩惱だらけのエルフだなコイツ……」

「ところでなんで二人なんだ？」

アルフレートに聞かれ、わたしはため息をつくといきさつを話し始めた。

アルフレートとフロロとはぐれたあと、行き止まりにあつた見るからに怪しい仕掛けにイルヴアが手を出し、わたしとヘクターだけ落とし穴に落ちたこと。プールのような水たまりに落とされて今も服が湿っていること。気持ち悪い魚人のようなモンスターに襲われ

たこと。

「そっぴや二人が消えたとき、そっちはどうしてたの？」

わたしの質問にフロロは首を傾げる。

「すぐ気づいたけど……。通って来たはずの道が塞がってた。どうにもなんないから諦めた」

「あっさりしてんのね……」

脱力するわたし。

「そっぴえば、面白い事がわかったぞ」

アルフレートはそう言うつと、わたし達をぐるりと見た。

「さっき我々もワーウルフのような人狼にあつたんだがな」

「ワーウルフ？大丈夫だったの？」

「まあ、聞け。私の術であっさり葬ってやった。そしたらな……。中身はなんだったと思う？」

中身つて……。グロテスクなことというなあ。もつと小さいワーウルフが出てくるとか？わたしがしょうもない想像を膨らましていると隣のヘクターが口を開いた。

「……人形だった、だろ？」

「なんだ、気づいてたのか」

アルフレートがさもつまらなそうに言う。

「人形つて……。さっきの魚もそうだったの？」

わたしが聞くと、ヘクターは頷く。

「切った瞬間、あれ？とは思ったんだ。倒れてからも全部がプールに消えて行くのも妙だと思った。たぶん正体隠す為の動きだったんじゃないかな」

そう言われてみればそうだけど……。全然気づきもしなかった。ああ、つくづく使えないな、わたし……。

「こっちは精霊の力が変なんですすぐ気づいたんだがな。死体……とっていいかわからんが、調べたら限りなく生物に似せているが機械仕掛けのように見えたな」

「バレットさんの発明品……！」

わたしは思わず声に出す。アルフレートは頷くと溜息をついた。
「だろうな。問題はなんでこんな面倒くさいことするのかってことだ」

「わたし達を騙すにしちゃ、お粗末なもんね……」

「見事に騙されてたんじゃないか」

アルフレートの突っ込みにわたしは聞こえないふりをした。

四人でひたすら暗い廊下を進んでいく。モンスターが生きものでない、と分かったにせよ、こちらに襲い掛かってくるのには変わらない。緊張は解けなかった。

「ねえ、まさかこれ無駄になんないわよね」

わたしはボゼウラスの入った革袋を持ち上げた。

「いいじゃん、楽しかったんだし」

フロロがあっけらかんと言う。

「わたしはいやよ！あんなに苦労したんだから」

「苦労したか？順調極まりなかったと思うが……」

アルフレートの言葉にわたしはちつつと指を振った。

「沢山歩いたわ」

はぁー、と息を吐くアルフレート。

「まあそうだね。いきなり一日がかりの旅はきついもんだよ」

ヘクターが慰めてくれた。が、アルフレートは反論する。

「おい、あんまり甘やかすなよ？私ですらこの細い足でがんばってるんだから」

「……エルフってみんなこんな感じなの？」

ヘクターが小声で耳打ちしてきた。違う、と思いたいがわたしもエルフの知り合いなんぞコイツしかいないし……。小説なんかで読んだエルフはもつと高尚だが浮世離れた物腰で、嫌味っぱくはなかったんだが。

ふと、前方に左に入る入口が見える。見ると無機質な小部屋にちょ

こん、と箱があつた。一方が蝶番で固定されて開くタイプの、見るからに宝箱です、といっているような箱だ。

「ね、ねえ……」

わたしが呟くとアルフレートが引き攣りながら答える。

「あ、ああ。あれは引つ掛かると思つて設置してあるのか？」

宝箱のある真上の天井に、フロロと同じぐらいの大きさの岩が吊してあるのだ。あんなでかい岩を天井に吊す努力は買うが、普通に視界に入る位置にあつては意味がない。

「えいつ」

フロロが小型ナイフを投げつけた。カンッ、と宝箱の留め具に当たると、

ぽすっ

妙に軽い音と共に岩が落ちてきた。

「つかー！あつ！本物の岩でもないんじゃない！」

張りばての岩をわたしは蹴り飛ばした。

本気で腹が立つてきた！

びたり、フロロの足が止まる。この反応はもしかして…。

「いるね、たぶんまたワーウルフだ」

フロロの言葉にアルフレートが感心したように頷く。

「耳がいいもんだなあ、私より反応が早いんだ」

エルフである彼も耳はいいはずだ。その上をいくんだから……便利
な探知機だなあ。そう思うと人間って情けないな！。このエルフが
高慢になるのも少しわかるぞ。

廊下を何度か曲がると、予想どおりのワーウルフが二匹揃ってのお
出迎え。身長はヘクターより頭二つほど高く、発達した上半身は腕
力の高さをうかがわせる。人狼……というより、二本足で立つ獣と
いうほうが近いかもしれない。さっきの話を聞いても作り物とは俄
かに信じがたい。金色の瞳をぎよるつかせ、不恰好な前脚を握り締
めている姿はかなーりリアル。

ヘクターが腰の剣を素早く抜いた瞬間、わたしは小声で唱えていた
呪文を完成させた！先制、いただきます！

「エネルギーボルト！」

魔術師の術としては初歩の初歩。純エネルギーの塊を敵にぶつける
術である。いまいち活躍の機会が無かった分、フラストレーション
の溜まっていたわたし。一番制御に自信のある呪文を使ってみた。
大きめのスイカほどある光球が、ワーウルフに向かって勢いよく飛
んでいく！

おーし、いったれ！わたしが握りこぶしを決めた瞬間、
ひよいつ

ワーウルフ達はエネルギーボルトの光球を左右によける。あああ！
そんな！

「ふー……」

「ため息つかないでよ、アルフレート！」

廊下にわたしの悲鳴がこだました。

ゴガアッ！獣の咆昂一つ、ワーウルフ達はこちらへ飛び掛かってきた。

ギーン！二つの拳がヘクターのロングソードにはじかれる。その間に少し退避させていただくわたし達。情けないというなかれ。戦士の邪魔をしないのも我々の仕事である。やみくもに拳を振り上げるワーウルフの攻撃を、ヘクターは軽々避けていく。

「やるなあ。応援歌でも歌ってやるか」

「止めて」

わたしの速答に、しぶしぶハープをしまうアルフレート。その時、ザンツ！ヘクターのロングソードがワーウルフの一体の喉元に刺さる。びくんっ、となるとそのまま倒れ、動かなくなった。その勢いで剣を引き抜くと、もう一体の腹あたりを切り付ける。

「ヴウヴッ！」

唸り声をあげながらなんとか避けるワーウルフ。が、ヘクターの次なる動作の方が早かった。首元から下に下ろされた剣によつてこちらも動かなくなる。パチパチパチ。思わず拍手するわたし達。ヘクターはやや照れ笑いだ。

「……アルフレートはなんで何もしないのよ」

まるきり自分のことは棚に上げたわたしの嫌味に、

「私が本気を出したらおまえ達の出番などないぞ？つまらないじゃないか」

いけしゃーしゃーと答える。どこまで本気かわからない。

と、わたしは気になっていたモンスターの「中身」を確認させていただく。いかにもグロテスクな見た目に我慢して近づくが、血は飛び散ってるわ、毛の質感もリアルだわでたじろいでしまう。オカルト好きを公言しているわたしであるが、実は活字のみいけるだけであつて血だとかリアルなものは苦手だったりする。勇気を出して切り口を覗くと、

「金属？」

思わずわたしは声を洩らした。皮一枚獣らしさを持っているだけで、中身は何かの金属でできているようだ。血も冷静に観察すればおそまつな作り物…… たぶん全身に管を通し、斬ると派手に血を吹き出すんだろう。

「まいったわね……。すっかりやられたわ」

わたしは悔しさから呟いた。

「なにはともあれ、まずはあの二人を探さないとな」

ヘクターが言うと、

「あの変態二人か」

アルフレートがさらりと答え、ヘクターの頬がやや引きつる。その時、

『きゃああああああ！！』

どこからか野太い悲鳴が聞こえ、わたし達は凍り付いた。

「ローザよ！」

わたしが叫ぶとフロロは頭上を指差す。

「上からだ」

わたし達四人はフロロを先頭に走りだした。角を曲がるとすぐに上にいく階段が見える。そのまま駆け上がるわたし達。しっかし……、早い！超早い！三人ともスゲー早い！わたしも走るのはさほど苦手ではないと思うのだが、みるみるうちに距離がひらいていくではないか！ちよつとは女の子のこと考えなさいよ！

そんなわたしの心の声が聞こえたのか、ヘクターがスピードを緩めて来てくれた。

「大丈夫？」

「大丈夫！それより今のつて……」

わたしが言いかけた時、

「おおおおおお！？」

前に行くアルフレートの奇声が聞こえた。見ると先にはポツカリと床が抜け、典型的な落し穴トラップ（作動済）になっている様子があつた。穴の直前で止まるわたし達。中を覗き込むと……一瞬、息

が止まってしまった。

巨大な剣山のようなとげとげが仕掛けられた落し穴、に見える。その針の中にアルフレート、さらにはローザとイルヴァの姿があったからだ。??…が、よく見るとゴムのような柔らかい素材でできているのか、針は三人の体重でぐにやりと頼りなくまがつている。なんだ……あせった……。

ふと前を見ると、フロロは穴を飛び越えたらしく反対側でピースサインをかましたりしている。さすがはモロロ族といったところか。「ぽかんとしてないで助ける」

憎たらしい声を上げたのはアルフレート。

「突っ走るあんたが悪いんでしょーが！それが人に物を頼む態度なの？」

わたしは思わずむっとして言い返した。

「まあまあ、リジアさん。ここで言い争っても無意味ですから、ちやちやっと引き上げて下さいよ」

お前が言うなよ、イルヴァ……。わたしのこめかみに浮き上がる一筋が見えたのか、ヘクターが「まあまあ……」となだめてくる。

しかし助けようにもどうやって……。無論、ロープ何ていう道具もなけりやはしごもない。ふと頭に『エンチャントロープ』という便利魔法が浮かんだりするが、あれは話にならない。わたしの最も苦手とする術のコントロールがものをいう類の魔法だ。

「ちよつと待ってて」

声は反対側から聞こえた。見るとフロロが何やら懷をがさがとまさぐり、ぽん、とロープの束を出すではないか。どうやってもあの小さな体に隠せるもんじゃない気がするのだが……。色々つつこみたいところであるが、とりあえず三人を救い出すことを優先してもらうことにする。

「ほい、つかまって」

下へロープを垂らすフロロ。

「サンキュー！」

すかさずそれを掴んだローザを見て、わたしは何か違和感を覚えた。
えーと、たぶん、それって……。

ぽひっ

真っ逆さまにローザの上に落ちるフロロ。

「あー……やっぱしそうなるよねー」

「ちよつと何納得してんのよ、リジア！早くこのグダグダ何とかしてよ！」

ローザの悲鳴がわたし達の耳を襲った。

怒り爆発とはこのことか。かなりのぐだぐだっぷりを経て、六人が無事再会をはたしたわけであるが、ローザの喚きは止まらない。

「全部この女のせいよ！」

そう言つて、びしつとイルヴァを指差す。

「大体『いかにも落ち穴です』って言ってるような切れ目の見える床で、いかにもーな宝箱なんてあつても触らないでしょフツー！」

この台詞で大体の状況が読めたわたしはため息をついた。

「その前から最悪だったのよ！でかい岩に追い掛けられるわ、火の矢が降ってくるわ、変なスライムは浴びるわ……！リジアたちとはぐれてから散々だったのよ？もーイヤ！絶対イヤ！この女と一緒にいるのは耐えられない！」

よく見ると、二人とも頭に不気味な半透明の物体がまだらに乗っていたりする。うわぁ、気持ち悪いだろうな……。しかしこつちもわたしとヘクターは未だ半乾きのままである。気持ち悪いったらない。「まあ、はぐれたこと自体がイルヴァのせいだしね。こつちも散々だったわよ。ずぶ濡れにはなるし」

わたしもそう言つて問題のイルヴァを横目で見るが、本人はしれつとしたままである。

「楽しんでいただけました？」

『やかましいっ！』

わたしとローザの声がハモる。ローザがさらに続ける。

「大体おかしいのよ、ここ。さっきバジリスクタイプのモンスターに会ったんだけど、イルヴァがあほみたいにバカーンと倒してみた……そいつら、中身が何だったと思う？」

「作り物だったんだろ？」

アルフレートの言葉にローザは片眉を上げた。

「知ってたの？早く言いなさいよ」

「わたし達もさっき、その話をしてたのよ」

わたしが言うと、ヘクターとフロロが頷いた。暫しの沈黙ののち、アルフレートが口を開く。

「年寄りの酔狂に付き合わされたわけだな」

わたしはため息と共に頷いた。カラクリ仕立てのモンスターがうろついているだけなら護衛とも考えられたが、馬鹿馬鹿しい罠に本気度ゼロの落とし穴。答えは一つしかない。バレットさんが遊んでいるのだ。

「……嫌なことだけど、依頼自体も怪しいわね。わたし達みたいなのを呼び寄せる口実だけなのかも」

「でも気になることがあるんですけど」

イルヴァが手を挙げる。

「村の人が失踪してる件ありましたよね？ここで彷徨ってるうちに罠にかかって、とかだったら結構洒落になってない気がするんですけど……。って何ですか、その顔」

わたしの冷たい視線に気付いたのか、イルヴァが不満そうに口を尖らせた。

「あんたがまともなことを言ってるのが気に食わないだけよ」

「あ、リジアったら嫉妬しちゃって」

イラツとするが、これは受け流すことにする。

「確かに住民が失踪してるなんて話があったわね」

ローザが呟いた。

「噂レベルの話、だがな」

とアルフレート。

「どっちにしろ、よ。こうなったら最後まで付き合っちゃおうと思うのよ」

わたしの言葉にみんな首を傾げる。その様子を見てわたしは言葉を続けた。

「悪の親玉を、正しき冒険者が倒してハッピーエンドを迎えるのよ」

決戦！vsガーシュライザー

「そこまでよ！」

掛け声と共に扉を勢いよく開けるわたし達。屋敷の最深部であろう大部屋の中にはバレットさんと猫達が勢揃いしていた。バレットさんは妙な目だけを覆う仮面、猫たちはドクロのプリントがしてある黒の全身タイツ姿。

ちなみに此処に来るまで何回もこの台詞と共に誰もいない部屋を開け続けていたりする。今だバレットさんの企みなんぞわからないままだが、とにかくノリとで押し切ることに決めた。

「あなたの企みはお見通しよ！」

善神の信者であるローザも張り切って叫ぶ。彼女も好きな展開ではある。一瞬、バレットさんは面食らった顔になる。

「あなたが捕らえている村人も返してもらおうよ！」

ローザがきりりと決めると、バレットさんは「はて？」と呟く。本気で「何の話でしょう？」という顔だ。

「と、とぼけないでよ！」

「ちよつと待って、ローザちゃん」

わたしはローザを手で制した。

「あなたがこの村の人の行方不明事件に関わっているっていう噂があるのよ。あなたの家に入っていく姿が最後、その後の行方がわからない人がいるって」

暫く頭に「？」を浮かべた様子のバレットさん。次の瞬間、ぽんと手を叩くと、

「ああ、そういうや駆け落ちのカップルやら夜逃げ家族やら逃がしてやったことがあったなあ。村人と深い関わりが無くて小金がありそうなしに相談してくる『訳あり』な人も多くてのー」
ぽりぽり、と頭を掻く。

「……嘘をついてるようには見えないけど、どうする？」

わたしがローザをはじめ周りに訪ねると、

「なら別に戦う理由無くない？」とローザ。

「あーあ、盛り下がっちゃった」と溜息ついたのはアルフレート。

「……だよね。バレットさん、これ、頼まれてたポゼウ……」

わたしがそこまで言いかけた時だった。

「そ、それは困るぞ！ わしは遊びたいんじゃない！」

慌てたのはバレットさん。……この人、たいしたシナリオ考えずに見切り発車だったんだな？

「『遊びたい』ってのはつきり言っちゃいましたね」

ウォーハンマーを仕舞うかどうか迷う素振りでイルヴァが言った。

わたしは深呼吸すると、手をあげ叫んだ。

「仕切り直しよ！」

「あなたの企みは全てお見通しよ！」

ローザがびしつとバレットさんを指差す。

「ふ……ふはは、ふはははははは！ それなら話しは早い……。シヨ

ータイムといこうか！」

さっきの間でキャラ作りの終わったらしいバレットさんは、ざっ！ 右手を高らかに上げる。

「我が力、見せてやる！ いでよ、ガーシュライザー！！」

ドンッ！！

大層な名前と共に天井より現れたそれは、踏ん張った足を緩やかに直立の体勢に戻すとわたし達の方へと頭を上げる。全身金属片をまとったその姿は一昔前の甲冑の鎧のようにも見える。ただ、とにかくでかい。本の世界でしか見た事はない巨人族ぐらいあるんじゃないか。

「な、何よこれ……」

わたしは思わず乾いた声を出してしまった。バレットさんが巨人の後ろから嬉しそうな声を上げる。

「驚いたかね！？私の研究の結晶、ロボットマシーン『ガーシユライザー』だよ！」

はっはっは！と悪そうな高笑いが響く。見ると操縦する端末なのだろうか、レバーのようなものが二つ付いたへんちくりんな箱を持っている。

「こいつの特徴はパワーならトルル並み、しかしながら脚部の安定性によりスピードも……」

うだうだとしやべるバレットさんを総シカトしたイルヴァ、ヘクターの二人が巨人に向かって駆け出した。

「ふっ！！」

気合い一線、イルヴァが巨人の脛の辺りにウォーハンマーで叩き付ける。轟音が部屋に響き渡った。

「話を聞けー！私の素晴らしい発明品じゃぞー！！」

バレットさんがわーわー騒ぐがおかまい無し。イルヴァは攻撃の手を休めない。たぶんうちのバーサーカーにとっちゃ「わーい、何かボコリ甲斐のあるやつがでてきたぞー」ぐらいにしか思っていないのかも。ヘクターも巨人の足、胴体の関節に当たる部分に切り掛かりながら様子を伺っている。

巨人の方と言えば二人の攻撃が致命傷にはならないものの、明らかにオタオタした様子で必死にパンチやらを繰り出しているが、軽々と避けられている。性能は良くとも操縦が追いついていないらしい。「……どうする？このまま見てる？」

ローザがこっそりわたしに耳打ちしてきた。

「うーん……。まあでもそれも盛り下がるわよね。下の方だと二人に当たっちゃうかもしれないから、頭の方狙って何か撃ってみようか」

わたしが答えるとローザが心底嫌そうな顔になる。

「あんたが？……まあいいけど……。絶対大丈夫！って自信のある魔法限定ね」

しつこく念を押される。うむ、信用されてない。

「エネルギーボルト！」

わたしの指先から光球が放たれる。バリエーションが無くて申し訳ないが自信のある魔法といえればこれしか思いつかない。圧縮されたエネルギー弾は巨人の方へ進んで行くが、ひょいっ

またも避けられてしまった。

「ああん、もう！避けないでよ！」

「……」

何か言いたげにアルフレートが口を開くが「突っ込むのも面倒くさい」とばかりに溜息に終る。

「わわわ！」

「にゃー！」

避けられたエネルギーボルトはそのままバレットさん達の頭上へと飛んで行き、壁に当たってボンッ！！爆発した。

「気をつけなさい！危ないじゃないか！」

「あはは、ごめんなさい！」

バレットさんに思わず謝るわたし。

「何とも間抜けな戦いになってきたな」

あきれ顔で言うアルフレートにローザが詰め寄る。

「文句言うならあんたも何か参加しなさいよ」

「いいのか？私が手を出せば実につまらない事になるぞ？」

何回聞いたか分からない台詞にわたしも口を出す。

「何度目？それ。いいからそのつまらないのを見せてみなさいよ」

アルフレートは肩をすくめると、呪文を唱え出した。

やおら精霊達が集まり出す。

「アークボルト」

アルフレートが静かに言い放った瞬間、バシッ！！

巨人の足下から頭上に電流と思われる光の筋が走った。巨人は動きを止め、そのままフラリと傾く。

「うわ！あぶね！」

足下にいたヘクターが堪らず後ろに下がった。ズズズン……と巨人が粉塵を立てながら沈んでいったのを見て、わたしは思わず呟いた。

「……あっけないわね」

「だから言っただろうが」

アルフレートは納得がいかない、といった様子で少しむっとして答えた。

「いやー、楽しかったよ」

バレットさんはビールを片手に朗らかに笑った。場所はバレット邸の食堂。戦っていた場所は地下一階だったらしく、階段を上がると初めに来た時のバレットさんの家になっていた。

あの後、何とかライザーが倒れるとバレットさんは嬉しそうに笑い、「降参、降参」と言ってきたのだ。何となく状況は掴めてきたものの、未だ消化不良のわたし達。詳しい事は上で、この言葉にとりあえず言われるままついてきたのだが。

「さて、と……、何だってこんな真似を？」

本当ならバレットさんの胸倉を掴み、「吐けー全部吐くのじゃー！」と言いたところだが、押さえ込んでわたしは静かに尋ねた。

「悪かったのー。年寄りの悪ふざけに付き合わせて。わしの趣味なんだなー」

「しゅ、趣味って……！」

ローザが怒り籠った口調で何やら言いかけるが、直ぐに馬鹿馬鹿しくなったのか溜息に変わる。

「要するにわたし達の反応を楽しむ為だけにやったんですね？あの入り口の血だとか……」

わたしの質問にバレットさんは嬉しそうに髭をさすった。

「ああいう状況を見せれば、中に入るしかあるまい？」

反論しようとしたが言葉に詰まる。あんな依頼人に危害があったようにも見える状況で逃げ帰ったら、それこそ末代までの恥だ。

「いつもこんなことしてるんですか？」

フルーツジュースを飲みつつわたしが聞くと、

「何度か」

としれつと答えた。

「あれ？でも学園に依頼するの初めてって言ってたわよね？」

ローザが聞くとバレットさんは頭を掻いた。

「ここに越してからは、ね。前に住んでた国では何度かその国の学園から学生呼んでただけけど、何度もこういうことやってたら受けてくれなくなっちゃった」

そう言つてビールをぐびり。

「しかしどつからバレちゃってたの？ まだまだ罠はいっぱいあったのになー。もつと時間掛かるかと思つたのに」

バレットさんがぐちぐち言い出した。最終場である大部屋に踏み込んだ時のわたし達の反応からだろう。

「あんだだけバレバレの罠なら誰でも気づきますよ。危害加える気ゼ口なんだもん」

わたしはバレットさんを睨む。すると横にいた白猫タンタが口を開いた。

「でもおねーさんがプールに落ちた時はひやりとしましたにゃー。

気を失つててもおかしくにゃい高さだったからにゃ」

「ああ、その時は魚人型ロボットに救助させる予定だったから大丈夫」

バレットさんが手を振り答える。……良かった、助けられたのがこの人からで。わたしは目の前でおかしをパクつくヘクターを見ると大きく頷いた。というか、全部見てたのかい！ という仕組みではもう聞く気も起こらない。どうせ「わしの発明品」だろう。

「そうそう、実は君達があのかーシュライザーを倒すの最短記録だったんだよね」

「あー……あのあつけない幕切れですか」

イルヴアが力の抜けきつた声で言う。

「はいはい、私が悪い私が悪い」

アルフレートがぶつくさ呟く。

「いやいや、お嬢ちゃんとお兄さんの戦い方も見事だった。あんだけがーシュライザーが押されるのも驚いたさ。最後の呪文も綺麗なもんだった」

バレットさんは一人うんうんと頷く。

「そこで、だ。君達に私から贈り物をしたい」

その言葉にわたし達6人の目が輝いた。現金なものである。

「こ、これは……」

テーブルに置かれたそれを目の前に、わたし達は息を飲む。

緑色の小さな生き物。全体の半分以上を占めるしっぽを入れてもわたしの腕ぐらいか。

「……とかげ？」

「イグアナ！」

わたしの言葉をバレットさんが厳しく訂正する。

「いや……これ貰っても困るんですけど」

わたしが遠慮なしに言うのとバレットさんはちつつちと指を振る。

「これはイグアナ型ロボットでな。私は今人口知能の研究をしとるんだが、これが第1弾。この世に二つとない大発明じゃぞ？」

いやー……そう言われても。ペットを押し付けられても困るんですよ。

「まあまあ、まだあるぞい。誰かこのイグアナのココに触れてみなさい」

バレットさんが指さすのはイグアナの首にある小さな赤い宝石のようなもの。誰もが無言で躊躇する中、フロロが一步踏み出すとそのままイグアナの首もとへ手を伸ばす。その瞬間、何の音も振動も無く、フロロの姿が消えてしまったではないか。

「きゃああー！！ちよつと！フロロ！」

思わずわたしは悲鳴を上げた。

「大丈夫大丈夫。……フロロくん、中にも同じようなボタンがあるだろう。それにまた触れてみなさい」

次の瞬間、わたし達の前にフロロが現れた。みんなが息を飲むなか、フロロは目をぱちぱちすると飛び跳ねる。

「すごいーすごいー！すごいーすごいー」

部屋を踊りながらまわる彼を捕まえるとわたしは訪ねる。

「何！？何が起きたの！？」

「リジアもやってみなよ。新しい世界が開けるよ」

も、もうちょつと解りやすい説明を……。わたしには彼が透明人間になったかと思えば、また姿を現したようにしか見えなかった。

わたしが文句を言おうと口を開くと、

「あ」

ローザの声が後ろから聞こえる。振り向くとイグアナを囲む人数が減っているではないか。いないのは……。ヘクター！

「ど、どこ行っちゃったの！？」

バレットさんは黙ってテーブルを指差す。すなわち、イグアナを残ったわたし達はお互いの顔を見る。

「イ、イグアナの中に居るってこと？」

ローザが眉間に皺寄せながら尋ねるも、バレットさんはにこにこしているだけで答えない。もう！

堪らなく不安だが、どうなっているのか知りたい欲求の方が大きくなってきた。

ええい、ままよ！

深呼吸すると、わたしはそつとイグアナに手を伸ばした。

一瞬のふらつきはあったものの、何が起きたか解らないわたしの前に見知らぬ光景が広がる。何もない部屋。そこにわたしはいた。

わたしのそんなに広くない自室より狭く、広めの物置といったところか。光源がどこなのかわからないが不快でない程度に明るい。

左手に一つドアがある。一つ深く息をするとわたしはドアの方へと足を進めた。その時、そこからヘクターの顔がひよいと現れるではないか。わたしが安堵の息を吐くと彼の方もこちらを見て微笑む。

「こつち来てみなよ」

わたしがそちらへ向かおうと足を踏み出すと、そこへフロロが現れたのでわたしは彼に尋ねる。

「みんなは？」

「外でじゃんけんしてる」

「あつそ……」

わたし達三人がいなくなっているというのに薄情な奴らだ。

ふと視線をフロロが出現した方向にやると、壁に拳ほどの赤いものが張り付いているのが見える。なるほど、あれが『こちら側』からのスイッチらしい。ヘクターとフロロが入っていたドアの方へ行き中を覗くと、わたしは一瞬言葉を失った。

その部屋はおよそわたしが見たことのない世界であった。部屋の上半分は窓で覆われ、下の方は機械のようなもので埋め尽くされている。その前にはやたら角ばった椅子が二脚。操縦席、というやつだろうか？窓の外の光景はというと

「何これ、イグアナからの視線ってこと？」

まるで自分がピクシーにでもなったかのように、先ほどまでわたしがいたバレット邸の食堂が引き延ばされた大きさで見える。ビールを飲むバレットさんも、その周りにいる猫たちもドラゴンのように大きいのだ。イルヴァとアルフレートがじゃんけんをしている姿も見える。

それを見て、わたしはふと気づき、先ほどの部屋へと戻る。部屋の中には呆然と立ち尽くすローザの姿があった。

「さて、どんなものか大体解って貰えたかね？」

バレットさんはいまだ茫然とするわたし達を見て満足そうに笑った。全員あの部屋に入った後、暫く観察して再び外へと戻ってきたのだが。やっぱり何が何やら、という感想だ。

「仕組みはさっぱりですけど……ようするにこの子の中に入れるんですね？」

この子という言葉に反応したのか、イグアナがつぶらな瞳をわたしに向けて首を傾げる。こういう仕草を見ると可愛い気もする。

「そう、このイグアナ型ロボット『フローラ』ちゃんは」

ぶおっ！アルフレートがレモンソーダを吹き出す。バレットさんは気にも留めずに続ける。

「移動式コンパクト邸宅なのじゃ」

……聞いた事ないがネーミングで言いたい事は大体わかる。センスはどうかと思うが。

「邸宅……って様子じゃないがな。あの狭さじゃ」

あの後恐る恐るイグアナの中へやって来たアルフレートがきっぱり言い放つ。その言葉にもバレットさんは鼻で笑って答える。

「このフローラちゃんはこれで終わりじゃないぞい。……なんとなく、成長するんじゃないよ。イグアナの成長速度は知っているかな？ものすごく大きくなるんじゃないぞ」

胸を張って説明されるが疑問は解決していない。

「……あの、これってロボットですよね？」

わたしの言葉にバレットさんは大きく頷く。

「そうとも。しかしこれがバレット流発明品のすごいところ」

自分で言っちゃったよ。

「イグアナの生体を研究して組み立てたんでな。まさに本物と同じようなペースで成長するぞい。しかもそれに合わせて中也拡張を続

ける。1年も立てばこの中で揃って暮らせるようになるかもしれない」

「おお！それってすごいことじゃない！」

ローザが歓声を上げた。わたし達6人が冒険の旅に出るに当たって、住居の心配が無くなったわけだ。

「二つあった部屋の片方、あれって操縦室？」

フロロがワクワク顔で聞くが、返ってきた答えは理不尽なものだった。

「操縦というか……お願いできるぞい。フローラちゃんに」
何じゃそれは。

「それじゃ、気をつけてな」

寂しそうにぼつりと呟くバレットさんとヘクターが握手をする。

「また来ます」

ヘクターの言葉にたちまちバレットさんは笑顔になった。きっと普段の生活は退屈なのだろう。もう少し家の外に出ればいいのに。

「絶対またくるにゃー」

白猫タンタとわたしはがっちり抱き合った。もふもふで気持ちよすぎる。

依頼完了の証明書を受け取り、わたし達は馬車へと乗り込んだ。山の麓までだが、行商の人に乗せていってもらえることになったのだ。もちろん護衛も兼ねてである。

馬車に乗り込もうとした時、タンタが駆けてきてわたしのローブの裾を引っ張った。

「お土産にゃー」

小さな手に乗ったそれはバスケットだ。可愛らしい小花柄のクロスを開けると焼き菓子とタンタのような耳と手足が黒い白猫のぬいぐるみがあった。

「あなたが作ったの？」

わたしが尋ねるとタンタは恥ずかしそうに身をよじらせる。

「タンタの趣味だにゃ」

「ありがとう、大切にするね」

わたしはお礼を言くとタンタの頭を撫でた。

小さくなっていく村を眺め、胸が熱くなる。初めての冒険が終わったんだ。へんてこりんでは不思議なバレットさんと猫達だったが、お別れになるとどうしてこんなに寂しいんだろう。隣りから声がかかる。「また、すぐ来れるよ」

ヘクターの声に頷く。彼ともこんな風に話せるようになったこともわたしにとっては神様からの贈り物のようなものだ。案の定、戦いの場面では良い所は一つもなかったわたしだが、言いよりの無い満足に満たされていた。

おうちへ帰ろう

学園に戻ったわたしに待っていたのは爽快な日々であった。

「おはよ」

朝の学園、ローザが廊下に並ぶ個人ロッカーの前で挨拶してくる。

「おはよー。そっちは今日の一限何？」

わたしは自分のロッカーを開けつつ尋ねる。

「古代語の授業、退屈だわー……って、すごいわね」

ローザは横からわたしのロッカーを覗きつつ呟いた。

まず目につくのがどでかい「呪」の文字。誰かさんかは知らないが消しても消しても、律儀に毎日赤インクで書いてくる。何しろ朝消して、夕方帰宅しようと学園を出たところで忘れ物に気づき戻った時にはもう書かれていたこともあるのだから、これ自体が「呪いの文字」なんじゃないかと思ってしまう。その他にも扉の裏側には「破壊魔女」だとか「陰湿オタク」などと悪口三昧。陰湿はどっちじゃ！大体扉の表側は綺麗なのが気に食わん！

「何これ？」

ローザがロッカーに舞っている紙切れの一つを掴む。

「あ、見ない方が良くわよ。鬱になるから。ヘクターがなんでわたし達と組んだのかの恨み辛みをひたすら綴ってるだけだから」

「そ、そう」

「文章からして同じソーサラークラスか、違うクラスでも魔術師クラスっぽいけど」

「陰湿さからしてソーサラークラスじゃないかしら」

「どういう意味よ……」

とその時、聞き慣れた声が後ろからする。

「学園の影のアイドルにちよっかい出しちゃあしょーがないねー」

「フロロ……」

わたしが振り向くとそこには頭の上で手を組んだフロロがいた。

「あんたなんでこんな所にいんのよ。シーフクラスは校舎別じゃない。つーか『ちよつかい』って何よ」

「しっかもリジアと一緒に登下校までしてるみたいじゃんー。ズルいーズルいー」

わたしの言葉を無視して囃し立てるフロロ。そうなのだ。毎日待ち合わせして、というわけではないが、なんせこれまでもバスと一緒にだったりしたもんだからもうこれからは自然と一緒に通うことになる。どっちかが朝早い、帰り遅い、なんて日はバラバラだが今更シカトする方がおかしいじゃないか。

「ちよつとお！変な言い方すんな！」

わたしは顔と耳が熱くなるのを感じながら叫んだ。

「でもさあ、なんでリジアだけなわけ？あたしには何もないのが納得いかないわあ」

見当違いなローザの台詞に一瞬呆れそうになるが、確かにわたしのみに恨みを持つているとすると「犯人は女であり、『一緒にパーティー組みたかったよ』というよりは色恋の恨みである」ということだ。そう思うとなんだか複雑な気持ちになってきてしまう。何しろわたし自身がちよつと前まで、ヘクターに憧れてるけど影からこっそり見るだけの半ストーカー女だったわけだ。

学園の構成自体、魔術師クラスは女子が多め、前衛クラスは男子多めになっている。これは肉体の性質上から自然とそうなるのだが、両者が関わりを持つ機会が今回のような混合パーティーを組む時ぐらいしか無いわけだから、わたしのような立場の子はいっぱいいただろう。（逆もまた然り）

はつきり言っただけがヘクターとお近づきになれたのは運が良かったとしか言いようがないと思うので、違う子がヘクターと組んでいたらわたしがハンカチ噛みつつ日夜呪いの手紙をしたためていたのかもしれないのだ。

「で？あんたは何しに来たの？」

ローザの声に我に返るわたし。

「アルからの伝言ー。今日の放課後、一階カフェテリアに集合だつてさー」

フロロはアルフレートのことを『アル』と呼ぶ。理由は「長いからだそうだ。」

「レポート写させろ、とかじゃないわよね」

ローザの台詞にフロロは首をかしげる。レポートとはこないだの演習のレポートだ。締め切りにはまだちょっとあるが、もう提出しているグループも多い。わたし達かというと乗り気のしないことにはとことん食いつきの悪いエルフのお陰でいまだ未提出。

「知らないけど『面白いことがわかった』だつてさー」

フロロの言葉にわたしとローザは顔を見合わせた。

話をわたし達がチード村から学園に戻った時の事に戻そう。わたし達は町に帰ると真つ先に学園の教官たちのもとへ行った。『やってやったぜ、ざまーみる』的な気分で乗り込んだのだが、教官たちの反応に面食らってしまった。

学年主任のメザリオ教官は目を真つ赤にし、

「よくやった」

と全員の手を握って回り、女性教官は「立派になって」と泣く始末。他の教官からも「かわいい子には旅させろつて本当ですねえ」などの言葉と共に拍手を貰った。あまりの反応に複雑な気持ちになったのは言うまでもない。

後日レポートを出す前に簡単に旅の成果を報告するのだが、予定にはなかったバレット邸での出来事を話すうちに女性教官の顔が能面のように変わっていくのが怖かった。どうやらこの女性教官はうちの学園に赴任する前はローラス共和国以外の学園にいたらしく、バレットさんの悪名を知っているらしかった。「またやりやがったのか、あのクソじじい」といったところなのかもしれない。話しが終わるなりどこかへ問い合わせの手紙を書き始めたので、バレットさ

んはうちの学園も今回限りの付き合いになるに違いない。

また、意外な反応はわたし個人にもあった。

ソーサラークラスの自分の教室に戻った時だった。まだ旅の途中のグループ也多いらしく、校舎は閑散としていた。教室の扉を開けようとノブに手を掛けた時、向こう側にいたらしい人物が扉の隙間から、ぬつ、と顔を出したのだ。

「うわ！」

思わず驚きの声を上げるわたし。ぼさぼさの髪に真つ黒のローブで頭まで覆い、何とも暗い雰囲気の人物。よく見ると我が学友のロレンツであった。

「なんだ、びつくりさせないでよ……」

「なんだってなんだよ、こっちだってびつくりしたぜ」

ロレンツはそこまで言うとは急ににやりと笑う。

「で、どうだったんだよ。帰ってきたところなんだろ？」

顔に思いつき「どうせまた失敗やらかしたんだろ？」と書いてある。

「残念ねー、お望み通りの展開じゃないわよ。ばつちり成果上げてきて、今教官たちからも褒められてきたんだから」

わたしが胸張りつつ答えると意外にも彼は嬉しそうに、

「本当か！」

と言った。少し調子を崩されたわたしであったが、簡単に旅の話しをする。

「実は予定外の展開になっちゃって大変だったのよ。依頼人が消えたり、戦闘も多かったし……」

う、嘘は言っていないよ！わたしの言葉に心なしかロレンツの目が輝いていったように見えた。

「すごいじゃんか」

「ま、まあねー」

ロレンツは暫く窓の外を眺めていたかと思うと、ゆつくりと口を開いた。

「俺さ……、実はまだ迷ってたんだ」

「何を？」

「うん、……このまま本当に研究科に進んで、本当に旅に出なくていいのかって」

「……」

思わぬ話しにわたしは言葉を失ってしまった。

「あ、俺が冒険の旅に出るより研究に没頭したいっていうのは事実なんだ。俺自身、そっちの方が向いてるって自覚もあるし。……でも、何て言うのかな、せつかくここまでこの学園にいて、本当にこのまま研究だけの日々になっていいのかって」

「……何となく、わかるよ」

気安く返事したわけではない。わたしの本心だった。

「サンキュ。でもな、やっぱ俺にはお前らみたいになるのは無理だってわかった。俺は俺なりに研究科でがんばって、お前らのプラスになるような活躍ができるようにがんばるよ」

わたし達が冒険に出ている間、彼にもそれに値するような何かがあったのかもしれない。「どうしてそう思ったの？」と聞いていいのか迷っていると、わたしの顔に出ていたのか彼は話しを続けた。

「俺さ、お前がこのソーサークラスじゃはつきりいつて落ちこぼれなのを見ててさ、しかもお前、学科はそれなりに出来るくせに肝心の実技が全然なタイプだし、……それでも諦めないのがすごいと思うよ」

よ、喜んで良いのか微妙な話しな気もするが、結構嬉しい事言ってくれるじゃないの。

「俺はダメなんだよな。自分でも嫌になるぐらいプライド高いみたいで、一回失敗すると全部嫌になるわけ。でも、冒険なんて出て命がかつてる場でそんな性格だと駄目だと思ったんだ。……意外とお前みたいなタイプの方が向いてるんだと思うよ」

「ありがと」

ロレンツはいえいえ、という教室を出て行った。わたしはしばし

自分が何をしに来たのかも忘れてしまって、ぼんやりと扉を見つめていた。

「で、面白いことってえのは何なのかしら？」

ローザは、腕を組みふんぞり返るアルフレートに問いかける。放課後、カフェテリアに彼のお望み通り集まったわけだ。

「面白くなかったら即帰りますよ」とイルヴァ。

「お前らは私に冷たすぎないか……？」

ややふんぞり返りが緩くなってくるアルフレート。

「だって今日、コスプレ仲間の会合があるんですもん」

というイルヴァの本日の衣装は全身真っ白なボディースーツ。何処に売ってるの？

「連れてきたよー」

その声と共に現れたのは、ヘクターに肩車されたフロロ。

「遅くなってごめん。もう話し始まつてる？」

ヘクターは律儀にフロロを椅子にストンと座らせると自分も座った。

「これから。このエルフがもつたいぶっちゃってて」

わたしはアルフレートを指差した。アルフレートは「かわいくない奴らだ」とぶつくさ言いながら足下に手を伸ばす。

「よっこらせつと」

アルフレートがテーブルに置き出したのは本の山。見るからに年代物の古めかしい本から割と最近のものまであるようだ。

「……何？」

わたしが言うつとアルフレートはまあまあ、と手で制してきた。

「さて、全員揃ったところで話しを始めるとするか。……先日のチード村での事は全員記憶に新しいところであるが、いくつか私も気になる場所があつてね。調べてきたんだ」

「そんなことやってないで、早くレポート書いてよ」

わたしの真っ当な突っ込みに、

「……私が気になった事というのは、だ」

それを無視して話しを続けるアルフレート。

「まず一個目がバレット邸にいたあの世話好きな猫たちだ。かなり珍しい種族だろう、私も始めてみる種族だった」

「タンタ、かわいかったよな」

ヘクターの言葉にわたしはポケットに入れていたタンタのぬいぐるみを出す。

「ねー！本当にかわいかった！」

「お前ら、人の話しの腰を折るならもう止めてもいいんだぞ？」

アルフレートがこちらを睨みつつ言った。

「ごめんごめん、実はわたしも気になってた」

わたしの言葉にアルフレートは満足そうに頷いた。

「だろう？彼ららしき文献を探すのは骨が折れたぞ。……これだ」

そう言つて山から一冊抜き取ると、わたしの前に差し出す。わたしはそれを手に取るとパラパラとめくつてみた。

「……何よこれ、セクタ語？違うな……インジャル語じゃない？読めないわよ、こんなの」

共にローラス共和国からすれば『果て』と呼ばれるような遠い国の言語だ。

「なんだ、情けないな。まあインジャル語だと判っただけでも褒めてやる」

そう言つとアルフレートは本を読み上げ始めた。

「……『マーユ族』これだ。『マーユ族、ハイネカン地域に住む種族。猫のような外見だが二足歩行、知能も人間に近い。働くことが好きな為、非常に献身的。喉頭が未発達なのか、語尾が猫の鳴き声のようになる個体が多い。戦闘における能力が低いことから他地域で見られることは稀。』だそうだ。どうだ？多分これだろう。他にモ外見的特徴も出ているぞ」

えっへんといったアルフレートだが、正直「はあ、そうですか」としか言いようがない。何しろ本物に会っているのだから、今更種族

の名前がわかって……。

わたし達の反応が薄いことに気が付いたのか、アルフレートは眉間に皺寄せ言った。

「それだけ？」

いや、こつちこそそう言いたい。

「……で？ 終わり？ どうすんのよ、イルヴァなんか寝ちゃってるけど」

ローザが呆れ顔でイルヴァを指差す。見るとすびすびと寝息を立てるイルヴァの姿。……いや、確かにどうでもいい内容の話ではあったが、この短時間に寝る方が難しいだろ。アルフレートはこめかみを引き攣らせつつ、喚く。

「だから嫌なんだ。単細胞生物め……、おい！ 話しはこれで終わりじゃないぞ！ メインはこつからだ！」

「いいよイルヴァは……。ササツと次の話ししてよ」わたしはアルフレートに先を促す。

「むう……。まあいい。私のことを馬鹿にしてると後悔するぞ。……さて、もう一つの話しに移るとするか。」

アルフレートはまたも本の山に手を突っ込むと、比較的新しい本を出してきた。学術書にみえるそれは分厚く重そうだ。

「これだこれだ。よし、今度こそリジア、お前にも読めるぞ」

「失礼ね！ 大体インジャル語なんて読めるの、この学園でも教官の中で一人二人いるかどうか……え？ 何よ、ここ読めばいいの？」アルフレートが開いて指差すページを眺める。普通の共通語だ。見出しは『科学の可能性』と。太字になっている見出しの横に学者名が書いてある。

「『バレット・T・ヘスカル』……って、これバレットさんの事じゃないの！」

下にずらずらと続く記事の内容も『機械』だの『生活空間』だのといった単語が出てくることから間違いないようだ。わたしは本の表を見る。タイトルは『近代科学者』。前説を見る限り最近の偉い研

究者の功績をまとめた本のような。

「思ってたよりすごい人だったみたいね……」

わたしの横から本を覗きこんで、ローザが呟いた。

「偉い人ほど暇なんだなあー」

ヘクターの素直な感想。確かに、何やってんだあのじいさん。

「彼がどういう人物か、大体わかったかね？さてさて本題だ」

アルフレートは机にある本を、今度は片っ端から開いていった。

「次にこれを読んでみる」

アルフレートに示されたあるページが開かれた本をわたしは読み上げる。少し古めかしい本だが共通語だ。

「……私は面白い人物と知り合えたことを幸運に思う。彼は全く私を飽きさせないのだ。今日見せてもらった不思議な力ラクリは犬を模した玩具で、なんと鳴いたり跳ねたりする。くもつと見た目も本物に近づけたいんだ。それこそみんなが本物と見間違えて干し肉を投げ与えたりするぐらいにね。そう言ってバレットは自慢の白髭をさすのだった」

わたしは思わず本を手放す。ローザがその本を手元に引き寄せるとカバー側を見回した。

「『パエルニスタ国回顧録』アダム・クラウザー、ですって」

「彼は50年ほど前のパエルニスタの貴族だ。……そして彼の若かりし頃の回顧録にバレットという変わり者の発明家が出てくる。その頃にはすでに白髭だったようだな」

一瞬、場が静まり返る。

「すごい長生き？」

フロロが言った。

「バレットが人間じゃないなら有り得るかもな」

長寿の種族、エルフであるアルフレートが答える。暗に否定しているような響きだ。人間より長寿の種族なぞたくさんいるし、何世紀にも渡って歴史に登場するエルフもいる。

ただ、バレットさんは人間にしか見えなかった。少なくとも外見的

には。

「もしかして……これ全部？」

わたしはテーブルの上の本たちを見渡した。アルフレートは一冊ずつ手に取り説明を続ける。

「私の仮定論も入っているから何とも言えないな。全部鵜呑みにして聞くなよ？一番新しいものは一昨年発行された科学研究論文集。これは他の研究家の論文に少し余談で入っている程度。一番古いものは……これだ。友人に無理言って借りて来たものだから乱暴に扱うなよ」

そう言っただけで本が形になっている、ほとんど古文書のようなボロボロの冊子を出してくる。

「中はおろして現代の共通語だから古代文明時代じゃない。しかし『アガディア帝国』やら『メスト大陸』やら出てくるから600年は昔だな。名前もその頃の名前らしい名前だがね。『錬金術師バレスト』として登場している。これが彼のことなら私より長生きになるんだなあ」

とアルフレートは笑った。

「ど、どういうこと？」

わたしは乾いた声しか出なかった。

「さあね。半世紀、1世紀ごとぐらいに『変わり者の発明家』が登場している、って話しさ。名前はバレスト、バレスト、バラド、ブラッド、ブランド、……ここまでくると私のこじつけになるかな？ただ出現する地域も見事にバラバラだ。イーストエンドからウエストエンドまで……」

「一つ気になるのはさ、なんで有名になっていないんだ？」
ヘクターが赤い革張りの本を眺めながら聞いた。

「同業者の間じゃ有名なかもしれない。『ああ、またBが出た』なんてな。私が推したい仮説はこうだな。彼はもう何百年も前にいなくなっている。それ以降の『彼』は、彼の発明品……つまり口ボットに他ならない。なんてな、どうかね？」

「どう思った？」

帰りのバスの中、隣りに座るヘクターが語りかけてきた。

「うーん……、アルフレートの話しは面白がつて脚色している部分
が大きいと思う。わたしは単に、大昔の偉大な先輩にあやかつて同
じような名前を継いでる研究者が多いだけなんだと思うな」

言つてから我ながらつまらない事言つちやつたな、と思つたが正直
な感想だ。

「でも、本に載るようない人に出会つたっていうのは本当だもん
ね。フローラちゃんみたいなすごいものまで貰つちやつたし」

わたしが言つとヘクターは頷いた。

イグアナ『フローラちゃん』は話し合つた結果、ローザの家にお世
話になっている。彼女の家が一番学園に近い（というかすぐ裏）で
みんなが集まりやすい。その上お金持ちで家が広いからだ。

「俺も考えついたんだけどさ」

「え？」

「バレットさんは本当はずーっと未来から来た人、っていうの
はどう？未来からタイムマシンに乗つて、色んな時代で遊んでる
んだよ」

わたしはヘクターの口から、随分前に爆発的に売れた空想小説に出
てくる発明品の名前が出て来たことの方がおかしくて思わず笑つて
しまった。

それから二人で暫く「バレットさんのタイムマシン紀行」の空想
話で盛り上がった。考えたところで本当のことなどわからないの
だ。だったら勝手に想像して話しのタネにした方がおもしろい。

ヘクターは退屈しのぎに話題を振ってくれたのかもしれないけれど、
わたしはこのままこの時間がずっと続いてくれないか、そればかり
を考えていた。

また明日から学園での馬鹿騒ぎを楽しむ。その輪には新しい仲間が追加されたのだ。

ただ憧れるだけだった人という最高の展開でもって。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3958q/>

タダシイ冒険の仕方

2011年5月4日16時56分発行